

中央南幹線
下水管渠築造
に伴う
遺跡調査概報



瓜生堂遺跡

1971. 12

中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会

は し が き

中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会

理 事 長 益 倉 辰 次 郎

東大阪市瓜生堂1～2丁目から南へ、若江西新町1～2丁目にかけてひろがる瓜生堂遺跡は、昭和40年から41年にかけて行なわれた、中央環状線敷設に伴う工業用水道管埋設工事と第二寝屋川開削工事によって発見され、弥生時代の大遺跡として知られています。

今回、大阪府によって着工されることになった寝屋川南部流域下水道中央南幹線下水道渠築造事業は、大阪中央環状線中央分離帯の東端を北から南に縦貫し、さらに西方に折れて小阪ポンプ場に至るもので、瓜生堂遺跡の範囲内を通過することになるため、工事の一時中止と全面にわたる発掘調査の必要を要望いたしました。その結果、この調査を大阪府よりの委託事業として実施することになり、同じく中央南幹線予定路線上に所在する西岩田遺跡の発掘調査と合わせて、中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会を組織しました。

調査は、まず2月24日より3月25日までの30日間を試掘調査に充て、つづいて全区間の全面発掘調査を5月4日に開始し、11月23日にほぼ完了しました。車がはげしく往來する中央環状線の中で、しかも工事現場という悪条件の下での調査であり、調査員・調査補助員・作業員の方がたのご苦労は並大抵ではなかったと思います。

今回の発掘調査によって出土した遺物は莫大な量に上り、現在整理作業を進めています。これまでの調査結果を一応まとめ、調査概報を刊行することにいたしました。本調査の進行・運営に当たっていただいている調査会の関係者、ならびに大阪府教育委員会文化財保護課、大阪府土木部下水道課、大阪府南部広域下水道建設事務所、同小阪工区、寝屋川南部広域下水道組合、さらに調査にご協力をいただいた株式会社森本組、不動建設株式会社、前田建設株式会社の関係各位に深甚の感謝を捧げる次第です。

例 言

1. この冊子は、中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会が、大阪府南部広域下水道建設事務所の委託を受けて実施した“中央南幹線下水管渠築造に伴う瓜生堂遺跡試掘調査および発掘調査”の概報である。
 2. この調査は、中央南幹線下水管渠築造予定路線上、東大阪市瓜生堂1～2丁目から同若江西新町1～2丁目にかけて所在する瓜生堂遺跡について、工事予定区域の延長450mについて層位別を実施した。
 3. 現場における調査としては、まず昭和46年2月24日より3月25日まで、発掘の予定路線全体の試掘調査および中央環状線北行車線押込東西両マンホール部の発掘調査にはじまり、これにつづく大阪府直営の東西延長250m分については5月4日より7月24日までの延82日間、さらに寝屋川南部広域下水道組合施工の延長200mについては8月23日より11月23日までの延93日間を費した。なお出土遺物の整理作業は現在継続中である。
 4. 本調査概報の執筆及び図版の作成は、田代克己・萩田昭次・中西靖人・今村道雄・北野保・松下彰・藤沢真依・奥井哲秀・岡本信夫・国兼和雄・曾我恭子・白井美紀子・大西真由美・藤原和子が分担した。また全体の監修は、調査部長田代克己、事務部長藤井直正の両名が当たった。
 5. 本調査中、3OS24で検出した第2号方形周溝墓に伴う人骨の化学処置については、奈良国立文化財研究所技官沢田正昭氏、人骨の鑑定については大阪市立大学医学部助教授寺門隆氏の手をわずらわした。
-



第1区 瓜生堂遺跡付近の景観

瓜生堂遺跡 目次

は し が き	理事長 益倉辰次郎
例 言	
I 遺跡の発見と調査の経過	2
1. 楠根川の改修と土器の出土	2
2. これまでの調査	2
3. 中央南幹線に伴う発掘調査	7
II 遺跡の位置	11
III 調査の概要	14
1. 調査地区の設定	14
2. 第1工区特殊マンホールの調査	15
3. 歴史時代および古墳時代の遺構	19
4. 弥生時代後期の遺構	22
5. 弥生時代中期の遺構	23
6. 方形周溝墓と土壘墓	30
IV 出土遺物	40
1. 弥生式土器	40
2. 石 器	42
3. 木 製 品	44
V ま と め	47

I 調査の経過

1. 楠根川の改修と 土器の出土

昭和9年3月、楠根川の改修工事が行なわれた。この工事によって、現在の東大阪市若江北町から若江西新町にかけての水田地帯で多量の弥生式土器、古墳時代の土師器・須恵器が出土した。若江北町信行寺の住職であった故巨摩峰春師は、たびたびこの改修工事の現場に立ち寄られ、遺物の採集につとめられていた。この時に収集されていた遺物は、ながく信行寺に所蔵されていたが、昭和41年、先代住職故巨摩峰秋師のご好意によって市に寄贈され、現在東大阪市教育委員会が所蔵している¹⁾。

また、東大阪市池島町浄慶寺住職であった故吉水順教師²⁾も、池島から大阪への通勤の途次ここを探訪し、遺物の発見に注意されていた。³⁾ この楠根川改修工事に伴って出土した遺物のそれぞれの出土地点やその状況は、当時の調査記録がないのでくわしいことは不明である。

2. これまでの調査

A 地点の発見

昭和40年2月初旬、荻田昭次は中学生数十名を引率して若江周辺の見学に出かけた。この時、若江西新町1丁目の大阪中央環状線敷設予定地を訪れたが、工業用水道管埋設工事のために掘り上げられた土に多数の弥生式土器片の包含している現場に遭遇し、土器片の採集につとめた。その後、大阪府立花園高等学校地歴部および近畿大学付属高等学校地歴同好会を主とする河内歴史研究グループの諸君による遺物の収集も進められた。

この工業用水道管の敷設工事は、幅5m、深さ3mを掘削するもので、包含層の範囲は南北約300mに及んでいることを確認した。これがA地点である。⁴⁾ この範囲の中心部と考えられる第3図5の地点の盛土上から青銅製利器の鋒先を発見した。⁵⁾

B 地点の発見



第2図 第二寝屋川開削工事と調査現場

昭和41年9月、大阪府によって第二寝屋川開削工事が行なわれた。この工事は、幅30mほどの楠根川の東側の堤防に矢板列を南北に打ち込み、先にその東側を幅30m掘削して水流をかえたあと、矢板の西側に当たる、もとの楠根川の河床を掘削して幅60mの新河川を築造するものである。工事現場を訪れた荻田昭次は、先に掘削した東壁断面に箱式組合木棺の木口部が露出しているのを発見した(第3図-6)。棺は西側の露出した木口部を20°~30°南に向ける方位にあった。底板の下

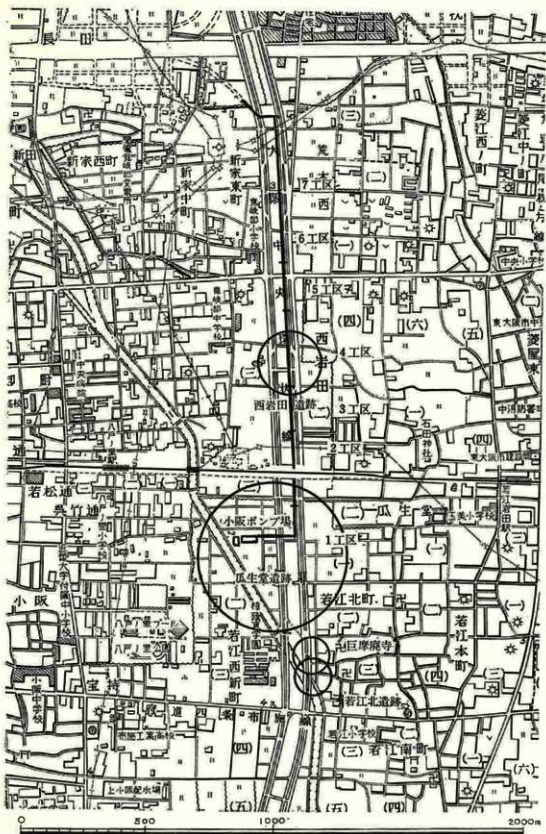
面は水田面下2.65mであり、幅65cmの底板の両側に2枚の側板がおかれ、底板の上面30cmに大・小2枚の蓋板が縦渡しの状態におかれていた。また、この木棺のすぐ北側に口縁部を西向きにした壺棺1基(第3図-8)、さらに北方30mに、1.5mの距離をもって平行に小型木棺2基(第3図-7)が出土した。小型木棺の方位は南北の方向である。また、新河川の中央に打ち込んだ矢板の東側にパワーショベルで掘りのこした幅1~3mの土壁の断面にも、壺棺1基(第3図-10)、壺棺1基(第3図-9)が出土した。壺棺の壺の底部は水田面下2.5mであり、壺の直立の位置から西北方に10~20°傾いた状態で出土した。この壺は器高35.5cm、腹径30cmであり、壺の上部に口径38cm、器高19cmの大型鉢がかぶせられていた。出土したときは、鉢が側面からの土圧によって押しつぶされ、壺の胴部の周囲に鉢の口縁部が密着していた。

この地点におけるこれらの墓域の発見については、直ちに奈良国立文化財研究所文部技官佐原 真氏に通知するとともに、枚岡市史編集室主任藤井直正氏に緊急発掘調査をすることができるよう、府ならびに工事事務所に折衝を依頼した。一方、業者にも協力方を依頼したが、工事の予定が遅れることと河川の壁が崩れることを理由により返事が得られなかった。また、藤井氏の各方面への折衝の努力にもかかわらず、業者は河川ブロック壁の工事の強行によって調査不能となった。現在、木口部が露出していた木棺は、工事により半分は破壊し、半分はブロック壁の下になっている。

C 地点の発見

同年12月31日、C地点第二次発掘調査の時、本B地点の矢板の西側の土壁断面に人骨を埋葬した木棺が露出しているのを、当時近畿大学学生であった島田義明君(現在、豊中市教育委員会職員)が発見した(第3図-11)。同木棺は頭位を北30°西にし、底板の上面は水田面下約4mで出土した。底板の長さは1.60m、幅は53cmであり、底板の北東角は、矢板により裁断されていた。これがB地点である。

昭和41年10月1日、当時中学生であった三輪榮一郎君は、B地点の西北方300mの地点で、弥生前期の土器を包含するセタシジミの貝層を発見した(第3図-1)。この貝層より弓管状鹿角製品1個が出土した。同年10月16・23・24の3日間にわたり、立命館大学学生松田正昭・原田修・近畿大学学生島田義明各君の協力により、B地点からC地点までの東壁断面の層位の実測をおこなった。この実測



第4図 中央南幹線と瓜生堂遺跡の位置

の結果、B地点からの中期の包含層とC地点からの前期の包含層はC地点の南方で70~80mほど重なり、中期の包含層の下面1.5mに前期の包含層があることを発見した。

同年11月5~7日、藤井直正氏によって大阪府教育委員会を通じて府河川課に折衝され、C地点の矢板の東側の調査—C地点第一次発掘調査をおこなったが、掘削により包含層の大部分は消滅しており、床面に残る前期の遺構24m²についての調査を行なった。この調査の結果、貝層・灰層をともなった住居跡の遺構を検出した(第3図-3)。

つづいて同年12月10日、C地点を訪れた藤井・萩田は、矢板の西側の掘削した河床に黒色粘土層があらわれ、多量の弥生式土器が散布しているのを発見した。再び藤井氏は大阪府教育委員会にこれを連絡されるとともに、河川課への折衝を行ない、同課および工事を担当している前田建設KKの協力によって、氏を調査主任としてC地点675m²についての第二次発掘調査を実施した(第3図-4)。同調査には府教委社会教育課より田代克己・井藤 徹・堀江門也・谷本 武各技師、奈良国立文化財研究所佐原 真氏ら数名の来援を得て、萩田昭次・桑原正明・島田義明・松田正昭諸氏のほか、近大附属高校、商大附属高校生徒諸君の協力を得て、翌年1月16日まで発掘調査を実施した。

このC地点第二次発掘調査により、多量の弥生時代前期の土器・石器・鹿角製品・木製農具などの遺物が出土し、無数の柱穴・木杭と溝などの遺構を検出した。⁵⁾

地点	所在地	遺構	発見年月
A	東大阪市 若江西新町1丁目	弥生中期の遺物 集落跡?	昭和40年2月
B	東大阪市 若江西新町2丁目	弥生中期の墓池	昭和41年9月
C	東大阪市 若江西新町1丁目	弥生前期の遺構 集落跡?	昭和41年10月

瓜生堂遺跡の各地点と遺構

- 1) 信行寺に所蔵されていた遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器のほか、若江南町に所在する若江寺跡出土の屋瓦資料がある。土器類については明確な出土地点はわからないが、梅根川改修工事によるものと考えられる。なおこの資料については、萩田が「布施周辺の考古遺物」(『河内文化』第8号、昭和37年11月)に紹介した。

- 2) 藤井が吉水氏の生存中に度々この状況をお聞きしたことがある。
- 3) この時の調査記録と出土遺物は、河内市教育委員会刊「瓜生堂遺跡」(昭和41年3月)にまとめ、また日本考古学協会第32回総会において荻田・藤井が「大阪府河内市瓜生堂遺跡」として報告した。
- 4) 荻田昭次「大阪府河内市瓜生堂遺跡に出土した銅利器片」(『古代学研究』第42・43合併号、昭和41年3月)
- 5) B地点およびC地点の調査成果については、略報であるが大阪府教育委員会より「東大阪市瓜生堂遺跡の調査」(昭和42年3月)として刊行されている。

3. 中央南幹線に伴う 発掘調査

昭和45年12月、東大阪一帯における浸水の解消と汚水処理を目的とする寝屋川南部流域下水道計画事業中央南幹線下水管渠築造工事が開始された。この下水管渠は、大阪中央環状線の中央にのこされている幅60mの分離帯を利用し、その東端に幅5m、深さ6mの溝渠を掘削し、その中に下水管渠を築造するもので、東大阪市の下水を集める小阪ポンプ場(東大阪市若江西新町1丁目所在)から、現在工事の進められている川俣^{かわまた}下水処理場(東大阪市川俣)に至る延長2,500mの下水道幹線である(第4図参照)。

さて、この工事が周知の瓜生堂遺跡の範囲内で開始されたことを知ったのは、銅矢板の打ち込み作業がすでにはじまってからであったが、東大阪市教育委員会は大阪府教育委員会文化財保護課にこの旨を連絡した。文化財保護課では、直ちにこの工事の主体者である大阪府土木部下水道課に通報され、工事は一時中止されることになった。翌昭和46年1月、大阪府教育委員会文化財保護課に、東大阪市教育委員会および府下水道課の関係者が集まり、この善後策についての協議を行なった。

この中央南幹線下水管渠築造予定路線上には、瓜生堂遺跡のほか、西岩田・新家阿遺跡をふくめて三カ所の遺跡の存在が知られているほか、未知の遺跡の存在している可能性も考えられる。

協議の結果、

- (1) これまでの経過から見て、遺跡の範囲がほぼ明らかであり、遺構等の存在も予想される瓜生堂遺跡については、銅矢板の打ち込み作業にとどめて工事を一時中止し、全面発掘調査を行なう。
- (2) 西岩田・新家阿遺跡の存在する近鉄線以北1500mについては、両遺跡の範囲が不明確であり、未確認の遺跡の検出を合わせて、工事に先立って試験調査を行なう。

上記の2点を基本線とすることに決定した。(1)についてはかなりの大規模な調査が予想され、期日・調査体制をどうするかという問題があり、府・市両教育委員会が検討することとして保留し、(2)の試掘調査については、東大阪市教育委員会を主体として「中央南幹線内遺跡調査会」を組織し、大阪府の委託事業として行なうこととした。この試掘調査は、昭和46年2月4日より3月15日までの延40日間を要し、調査結果は「中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査」として刊行した。

この試掘調査の結果、西岩田遺跡は予定路線延長180mにひろがっていることが確認され、この区間については全面発掘調査の必要を要望した。2月10日、再び関係者が協議し、西岩田遺跡および瓜生堂遺跡の調査方法については、さらに府・市両教育委員会が再三の話し合いを行なった。その結果、「中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会」を組織することとし、体制を整える一方、工事の施行者である大阪府南部広域下水道建設事務所及び同小阪工区の関係者と、期日・方法・経費等細部にわたって折衝・協議を重ね、調査のスムーズな進行をはかった。西岩田遺跡の発掘調査は、昭和46年2月20日より3月31日までを第一次、4月26日より6月26日までを第二次として調査を実施したが、この第一次調査期間中2月24日より3月25日までの30日間に瓜生堂遺跡の試掘調査を合わせて実施することとした。調査会の組織は別に示した通りであるが、この試掘調査には、近鉄高架下および中央環状線北行車線の押込マンホール部分の調査をふくめ、調査員として萩田昭次・北野 保の両名が担当した。

ところで、この中央南幹線下水管渠築造予定路線は、近鉄線高架をはさんで100mが第2工区、その南150mが第1工区であり、第2工区との境より西折して中央環状線を越えたところまでをふくんでいる。この間の工事については、大阪府の直営事業として実施されることになっており、第1工区が不動建設株式会社、第2工区は株式会社森本組の施工である。この間延長250mの発掘調査は5月4日に開始し、7月24日に終了した。

中央南幹線はさらにこれより小阪ポンプ場に至る200mの区間があり、この工事については大阪府が寝屋川南部広域下水道組合に委託して実施されることになっており、第1工区につづく120mが不動建設株式会社、のこり80mが前田建設株式会社の施工に決定した。調査会ではこれらの関係者と協議し、期日・方法等の話し合い

を行なった上、8月23日より11月23日まで延93日間にわたってこの区間の発掘調査を実施した。ただし不動建設施工部の120mは、中央南幹線と同じく幅員5m、深さ6mの掘削工事であるが、前田建設施工部の80mについては、ポンプ場増設までの仮管渠であるため幅員2m、深さ3.5mである。

以上が瓜生堂遺跡発掘調査の経過である。

現場における作業は、調査部長田代克己の指示に従い、調査員荻田昭次・中西靖人・今村道雄・北野保がそれぞれ担当し、調査補助員松下彰・奥井哲秀・藤沢真依・岡本信夫・国乗和雄・斉藤義則・杉山治夫・内田和博・柴原安正・浜田和仁・山本和清・佐藤正則がこれを補った。

なお、出土遺物は莫大な量に上り、現場における発掘調査と並行して、内業補助員赤城利子・寺田千津子・津田美智子のほか大阪樟蔭女子大学学生諸君の援助を得て整理作業を進めて来たが、10以降、土器については曾我森子、石器については白井美紀子、木器については大西真由美の各内業員がそれぞれ整理作業を進めている段階である。

調査開始以来今日まで、大阪府土木部下水道課、大阪府南部広域下水道建設事務所、同小阪工区および寝屋川南部広域下水道組合の関係各位には、調査の重要性をよく認識され、調査の進行をスムーズにするための配慮を得ているほか、機械による掘削、資材および作業員の提供等をおねがひした森本組、不動建設、前田建設等関係各位のご協力に対し記して感謝の意を表する次第である。

＜荻田昭次・藤井直正＞

中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会組織表

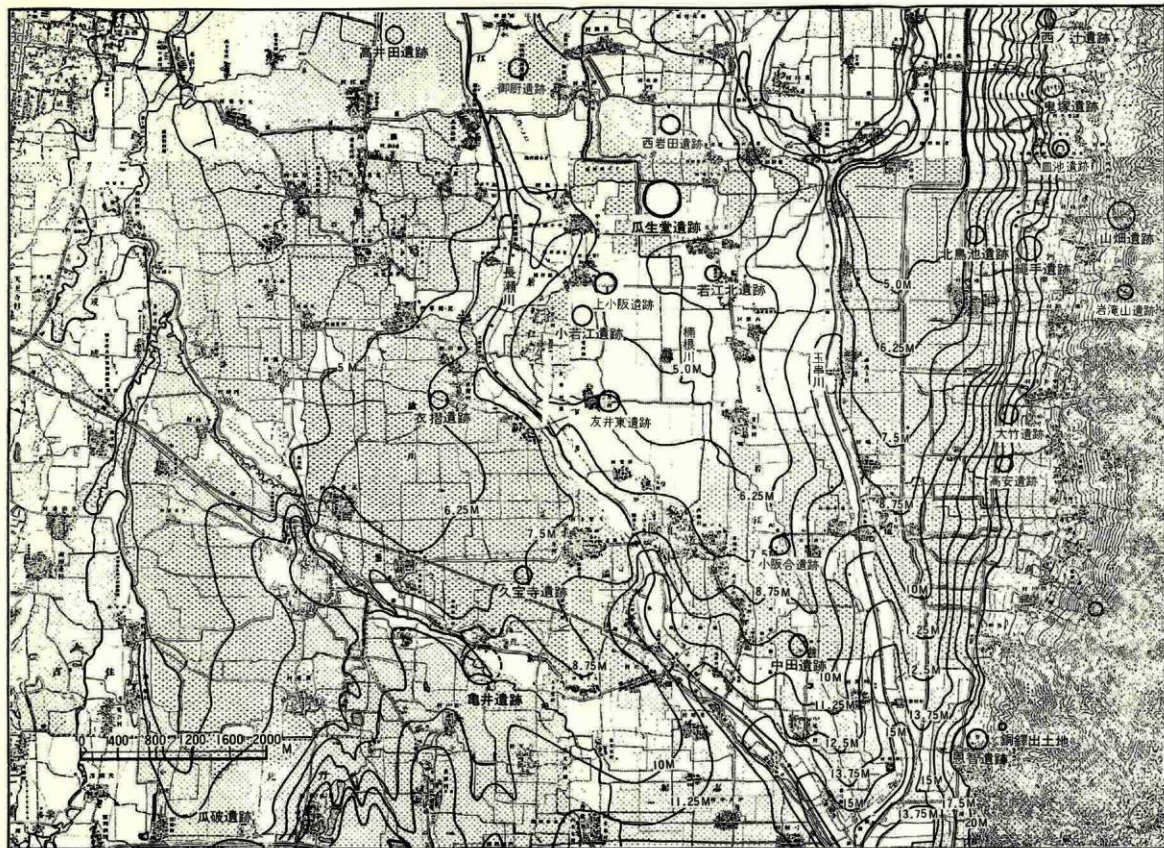
・理 事 会

	氏 名	役 職
理 事 長	益 倉 辰次郎	東大阪市教育委員会教育長
理 事	中 島 米次郎	大阪府教育委員会文化財保護課長
同	松 尾 恵 善	東大阪市教育委員会社会教育部参事
同	藤 澤 一 夫	帝塚山大学講師、大阪府文化財専門委員
監 事	中 田 昌 義	東大阪市文化財保護委員会会長
同	黒 田 榮 次	大阪府教育委員会総務課長

・職 員

	氏 名	役 職
調 査 部 長	田 代 克 己	大阪府教育委員会文化財保護課主査
調 査 員	堀 江 門 也	同 技師
同	萩 田 昭 次	東大阪市文化財専門委員
同	中 西 靖 人	
同	今 村 道 雄	
同	北 野 保	
調査補助員	松 下 彰	
同	藤 澤 真 依	
同	杉 山 治 夫	
同	斉 藤 義 則	
同	岡 本 信 夫	
同	国 栗 和 雄	
同	奥 井 哲 秀	
内 業 員	曾 我 恭 子	
同	白 井 美紀子	
同	大 西 真由美	
同	藤 原 和 子	
内業補助員	寺 田 千津子	
同	赤 城 利 子	
同	津 田 美智子	
事 務 部 長	藤 井 直 正	東大阪市教育委員会社会教育部主幹
事 務 職 員	阪 上 昌 代	
同	中 井 節 子	

(昭和48年10月1日現在)



第5図 河内平野の地形と遺跡の分布 (明治18年地形図八尾市亀井遺跡発掘調査既報197L 3 大阪府教育委員会) による

II 遺跡の位置

瓜生堂遺跡は、大阪府東大阪市瓜生堂1～3丁目から同若江西新町1～2丁目に所在し、大阪難波から奈良に通じる近畿日本鉄道奈良線の八戸の里駅と若江岩田駅のほぼ中間、近鉄高架の南方一帯にひろがる遺跡である。遺跡の範囲は、それまでの調査によって、大阪中央環状線と第二寝屋川との間の全面にわたり、北は近鉄線高架から南は中央環状線が第二寝屋川に交わる地点に及び、さらにその周辺をふくめて東西・南北とも600mあるいはそれ以上に延びる大遺跡と考えられる(第4図参照)。

ここ数年前まで水田のつづいていた付近一帯の景観は、中央環状線をはじめ、相次ぐ工事によってすっかり変貌した。元来瓜生堂遺跡の所在するこの地域一帯は、河内平野の中央に当たり、標高5～6mの低地である。そしてその中を第二寝屋川となった旧楠根川が南東より北西に向かって流れ、また東方約1.5mには旧大和川の本流の一つであった玉串川が流れている。古代における河内平野は、現在の恩智・玉串・楠根・長瀬などの各河川、すなわち旧大和川によって形成されたデルタ地帯であった。過去の調査ならびに今回の調査によって、本遺跡における位相状態は地点によって若干のちがいはみとめられるが、地表面下約2.5～4.0mに弥生中期、さらにその下に弥生前期の遺物包含層乃至遺構の存在を確認している。とくにC地点においては、弥生前期の遺構が地表面下約4m(OP98cm)の低いところにあることがわかっており、また前期と中期の層位には1.0～1.5mの差のあることが明らかになっている。また弥生後期や古墳時代の遺物包含層との間にも、砂層と粘土層のいちじるしい堆積が見られ、旧大和川の氾濫のはげしさと河内平野の形成過程を如実に物語っている。従って本遺跡に弥生人が生活していたころの生活環境は現在とはまったくちがった状態であったことを銘記しなければならない。これまでの調査と今回の調査の成果によって旧大和川の氾濫原に形成された微高地上に営まれた集落であったことが明らかになって来ている。

河内平野の低湿地に立地する遺跡として、瓜生堂遺跡は、その規模・内容によってにわかに注目を浴びることになったが、標高4～5m前後の低湿地に弥生時代の遺跡のあることは、本遺跡の西方約1.5mに所在する小若江遺跡(東大阪市小若江)をはじめ、昭和38年に発見・調査された高井田遺跡²⁾(東大阪市高井田西6丁目)、諸福遺跡³⁾(大東市西諸福)などによって知られている。高井田遺跡では、

標高 50cm 前後の地点から弥生前期の土器が出土し、また本遺跡の南方 2 km には後期の土器を出土する友井東遺跡⁴⁾ (東大阪市友井)、さらに衣摺遺跡⁵⁾ (東大阪市衣摺)、上小阪遺跡 (東大阪市上小阪) では弥生中期の土器が出土している。

古墳時代に入ると、遺跡の数はさらに増加し、「小若江式」の名が与えられた古式の土師器を出土する小若江遺跡のほかに、須恵器と木片を出土した弥刀遺跡⁶⁾ (東大阪市友井) など旧大和川の流れの一つ長瀬川に沿って点々とその分布をたどることができる。

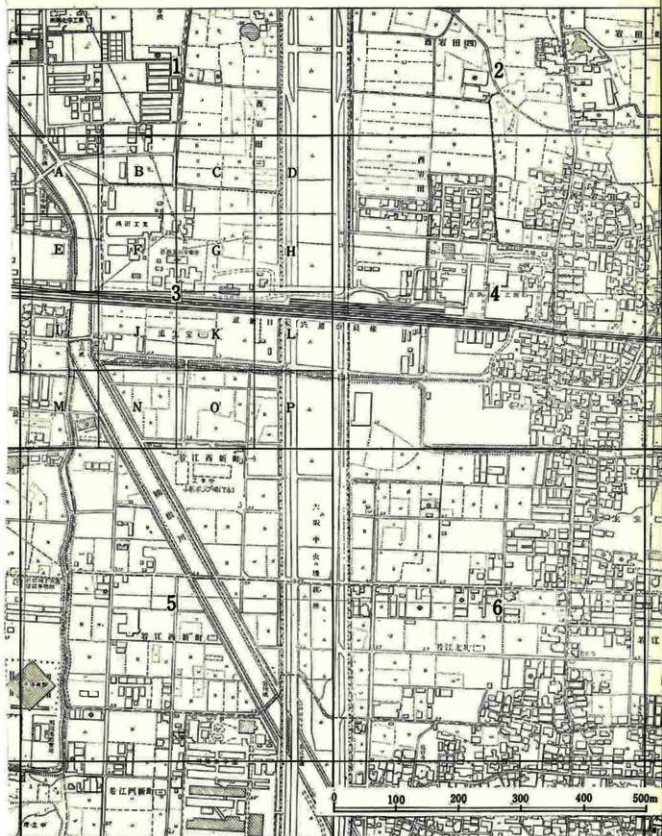
瓜生堂遺跡の北方 500m には、昭和46年2月から6月にかけて本調査会において発掘調査を行なった西岩田遺跡 (東大阪市西岩田2丁目) が存在している。5世紀の建築遺構、4世紀に比定される庄内式・酒津式土器の出土など、弥生時代末から古墳時代にかけての集落と考えられる。この遺跡は西方の意岐部遺跡⁷⁾と連なり、さらにその西方には、古墳時代から歴史時代に及ぶ御厨遺跡⁸⁾がある。

これらの諸遺跡は、旧大和川の堆積によって形成された微高地や自然堤防の上に立地していることがわかり、その分布をたどることによって、河内平野の形成と変遷の過程や当時の生活環境を解明することができることはいうまでもない (第5図参照)。

瓜生堂遺跡はこうした環境の中に存在する遺跡である。

- 1) 東大阪市小若江、近畿大学構内に存在する遺跡であるが、現在ではほとんど覆滅している。出土遺物については、坪井清足氏『關山県笠岡市高島遺蹟の研究』に実測図と考察が収録され、また原田 修・奥井哲秀・村上敏明三君により「小若江遺跡の出土遺物」(『河内考古学』2, 昭和43年10月)に紹介されている。
- 2) 布施市教育委員会「布施市高井田遺跡」(昭和38年5月)。なお高井田遺跡については、大阪築港牧岡線高速道路の建設に伴ない、昭和42年12月に橋脚部3カ所について発掘調査を行なった。
- 3) 大東市西諸富に所在するナショナル電気工場建設の際発見された遺跡であるが、資料は未発表である。
- 4) 荻田昭次氏「友井東遺跡」(『河内考古学』1, 昭和43年4月)
- 5) 荻田昭次氏「衣摺の弥生式土器」(『史談会報』第2号 昭和34年11月)
- 6) 荻田昭次氏「友井出土の須恵器と木片」(『河内文化』第11号, 昭和39年5月)

＜藤井直正＞



第6図 瓜生堂遺跡地区割図

Ⅲ 調査の概要

1. 調査地区の設定

従来の調査によって、瓜生堂遺跡の範囲は、近鉄奈良線以南 500 m 以上と推定され、西は第二寝屋川を越えることが明らかとなっている。中央環状線から東側については、どの程度の広がりをもちものであるか明らかでないにしても、極めて大規模な集落跡であることは間違いないものであり、今後の調査に備える意味からも、調査地区を明確に区分しておく必要があると考えたのである。

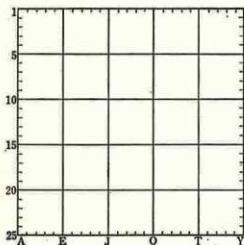
瓜生堂遺跡は、弥生時代前期～中期に及ぶ遺跡として知られて来たが、単に弥生時代の遺構を調査するだけでなく、弥生時代以後の遺構、とくに奈良・平安時代に属するものの存在を予想した場合は、条里遺構にそった地区割が望ましいこととなる。ただこの場合その基点をどこに置かが問題となるのであり、さらに今回調査の対象となった、下水管渠は、西に横断する計画であり、工事に際しては幅 5 m で鋼矢板を打った上で掘削される計画であることなどを考え合わせ、種々検討を加え、結果的にはこの下水道工事掘削幅及び方向に合わせて、5 m 四方を最小単位とする地区割を行なうこととしたのである。(第 6 図)。

すなわち、最大地区を 500 m 四方として数字によって表わし、この大地区をアルファベットによって 125 m 四方の中地区に分割し、さらにこれを、5 m 四方の小地区に分け、東西方向は西から A～Y のアルファベット、南北は北から南へ 1～25 までの数字で表わし、それぞれの地区が、3 PY10、3 LY10 など表わせるようにした(第 7 図)。

この様にして地区割を行なった結果、今回調査の対象となった地域は、3 地区の L と O および P 地区がその大部分で、下水処理場ポンプ室に近い西端の部分では一部 3 N 地区の東南隅と、5 B 地区の東北隅が含まれることとなった。

従来の調査結果から、瓜生堂遺跡については、遺物の出土地点や調査地点別に、A 地点 B 地点などと呼ばれて来たが、今後はこの地区割が、検出された遺構や遺物を、より正確に相互に関連づけて把握し、瓜生堂遺跡全体を考えて行く上での基本となるであろう。

〈田代克己〉



第 7 図 瓜生堂遺跡地区割綱目図

2. 第1工区特殊マンホール部の調査

東側特殊マンホール

東側特殊マンホール部の調査対象面積は、南北約8m、東西約5.3m、面積64m²を計り、その位置は近鉄奈良線高架脚部の南方250mの大阪中央環状線道路の中央分離帯西方部、北行車線に接するところで、今回の区域設定では3PO24・3PO25・3PR24・3PR25の区画にまたがっている。その地点は、昭和40年2～6月工業用水道管敷設工事に伴って多量の弥生時代中期の土器が出土し、本遺跡発見の発端となったA地点にあたり、青銅製利器片が出土した場所の北方60mにあたる。また、第二寝屋川の開削工事に並行して調査が進められ、弥生時代前期の遺構が検出されたC地点から東方300mの地点に位置している。調査は今回の工事に伴う発掘調査の試験的意味をもちながら、西谷田遺跡の調査と並行して行なった。

層 位

当地点における層位状態は下記および第8図に示した通りであるが、その層位の記録は主として東壁部を利用して作成した。盛土に次いで、茶褐色土層（表土）があり、その下層には暗茶褐色土層が堆積している。この土層は若干土粒の細かい砂質土で、この土層中において少量の須恵器・土師器の細片を検出した。これに続いて茶褐色砂質土層があり、その下層にはごく少量の植物遺体を包含する褐色砂層が認められる。そして比較的土粒の細かい青灰色砂層が存在するが、この砂層中において土師器小型丸底壺1個が出土した。これに続いて青緑色粘質土層があり、その下層にはTP-45cmをほぼ上面とする黒色砂質粘土層が約30cmの厚みをもって堆積している。しかし、上面から約10cm下底に至ると、上層よりも土粒の細かい粘土層となり、少なからずその差異が認められる。

また、この粘土層はわずかではあるが、全体的に南へ向かって低くなっており、その下層で確認した青灰色砂層は厚さ約10cmを有し、南方へ漸移的に低くなって調査地点中央部において途切れており、北半部においては黒色砂質粘土層を分断した状態を呈している。この黒色砂質粘土層中には、多量の弥生時代中期の土器が包含していたが、その多くは土層の下底部より検出した。また青灰色砂層が部分的に存在し、下層には青緑色粘土層が堆積していた。この層の上面が弥生時代中期の生活面であり、一条の溝を確認した。後にこの層を約1m深く掘削したが植物遺体を包含しているだけの状態であった。

遺 構

当調査地点南半で東北から南西に走る溝を検出した。この溝は粘

着力の強い青緑色粘土層上面に位置し、肩部における標高は東壁部の北側ではTP-約98cmで、溝底までの深さ約26cmを有し、同じく南側においては肩部の高さはTP-約1mで、その深さは約22cmを計り、南北の幅は3.2mである。この溝の延長部は工事用鋼矢板で切断されている。西壁部の北側の肩部の高さはTP-約1.1mで溝底までの深さは21cmを計る。また、南側の肩部における高さはTP-約1.1mであり、溝底までの深さ約20cmを有し、南北幅は2mを計る。

溝底中央部においては、両端より約10cm漸移的に低くなり、西方部に延びるにしたがって梯形に近い溝になるものと考えられる。その規模と地形的考察を加えた場合、この溝は東北から南西に対して流れていたものと思われる。そして東壁部に近い溝底において多量の弥生時代中期（機内第3・4様式）の土器が出土し、さらに石鏃・石廬丁と全長約22cmをはかる完形のふぐし（掘串）と木製の広鋸か平鉄の着柄部を検出し、また、直径約3cm、長さ95cmを計り、一方の先端部を人為的に削って加工したと思われる棒状の木片や柄の一部を工事用鋼矢板で切断されていたが残存部約57cmを有する木製の鋤も検出した。なお当地点においては一条の溝以外北半部には何ら遺構を踏認しえなかったが、溝内において異常に多量の土器・石器・木製品などの遺物が出土していることから考えて、当東側特殊マンホール部の南側に住居跡遺構などがあるものと推察される。

西側特殊マンホール

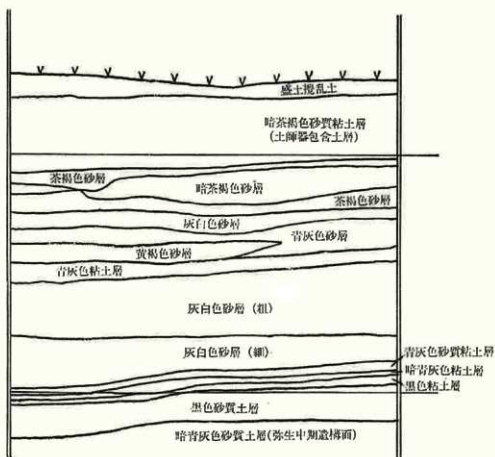
西側特殊マンホール部より西方35m、大阪中央環状線、北行車線を越えた歩道部に位置し、その調査面積は東側特殊マンホール部とほぼ同じである。区域設定では、3PI24・3PI25・3PI25の区画にまたがるD。

層 位

この調査地点においては、TP+2.6mをベースとし、南に延びるにしたがって激しい起伏をもつ暗茶褐色砂質土層があり、その上面に舞臺式土器1個体分の入ったピット1カ所を確認した。このピットは直径60cm、深さ40cmを計るU字状の比較的大きなものである。さらに厚さ20～50cmを有するこの暗茶褐色砂質土層中においても少量の土師器の細片を認めた。

下層においては、東壁部の南北に2カ所について層位状態を記録に留めたが、東特殊マンホール部において確認した青緑色砂質粘土層と同一堆積層と考えられる青緑色砂層を認め、その下層にTP-

50cm を上面にする弥生時代中期の土器を包含する黒色粘土層が存在した。その厚みは 33cm ほどであるが、下底に至ると砂を含んだ黒色砂質粘土層となる。しかし、約 4 m 南方部において記録した層位状態は青緑色砂質下に TP-15cm を上面とした全く遺物を包含しない黒灰色砂質粘土層が堆積し、この層も前記した北側の層位状態同様、下底においては黒さが増し、上層の黒灰色砂質粘土層よりも粘着力の強い暗黒色粘土層となっている。そしてこの次に黒色粘土の遺物包含層が堆積しているが、その上面における高さは TP 約 -40cm を計り、当調査地点において包含層自体が、南から北に漸移的に低くなっていることがうかがえる。さらに、包含層の下層に東側特殊マンホールで部分的に堆積している青灰色砂層が、全体的に約 15~25cm の厚みをもって堆積しており、下層の弥生時代中期の生活面である青緑色粘土層と遺物包含層とを分割した状態となっている。調査後、さらに約 50cm 深く青緑色粘土層を掘り下げた



第 8 図 3PG24東壁 N-S 断面図

遺 構

が、ここでも植物遺体を含有するのみであった。

当調査地点においては、南壁部に接して青緑色粘土層上面をベースとした土壇1カ所を検出した。その形態は長円形土壇であり、土壇の大きさは長径1.45m、短径約1.1m、深さ約35cmを計る。この土壇内において土壇の掘形の肩部における高さとはほとんど同じぐらいのレベルにおいて長径1.1m、短径0.95mの不整円形を呈するザル状の構造物を検出した。それらは残存状態が良好でないため定かではないが、ツル状の樹皮や樹枝などを格子状あるいは斜格子状にきめ細く組みあわされていたものと思われる。その厚みはわずかであり、かなりU字状に弯曲した状態を示し、またザル状の構造物の上には多量の灰が堆積していた。

この土壇内からは少量の土器と共に2片の獣骨が出土しているが、ザル状の構造物はこれらの上に据置かれた状態であった。この遺構は東特殊マンホール部より続く一連の遺構であり、遺物は石器のはく片と石庖丁の一部、さらに保存状態の良好な全長約28cm、幅約11cm、厚さ約2cmの木製田下駄が一点出土した。

このザル状の構造物を伴う土壇の相対的年代は多くの出土した土器の示す年代、すなわち弥生時代中期と考えられる。

＜萩田昭次・北野 保＞

3. 歴史時代および 古墳時代の遺構

瓜生堂遺跡の調査を開始するに当たって、その層位を確かめる意味をかねて、ヒューム管 押込み用に 設けられた ビット部分の 調査（別項、第1工区特殊マンホール部の調査参照）を実施したが、その結果、弥生時代中期だけでなく、その上層には古墳時代以降の遺物包含層も存在することが明らかとなった。また瓜生堂遺跡は弥生時代前期～中期の遺跡として知られて来たが、弥生時代後期の包含層の存在することも当然予想されるところであり、調査に際していきなり中期の遺物包含層まで掘り下げるのではなく、遺物や遺構を確かめながら、順次掘り下げを進めて行くこととしたのである。

こうして調査を実施した結果、以下に述べるように、奈良～平安時代に属する遺構や遺物を検出し、古墳時代についても、前期～後期に至る各時期の遺構や遺物を検出した。さらに部分的ではあるが、弥生時代後期の遺構や遺物をも検出することができたのである。

また今回の調査によって、幾本かの川がこの地域に流入していたことが明らかとなっているが、流入した砂層中に弥生時代中期の土器片を含む川、弥生時代後期の土器片を含む川、須恵器は含まないが、小形丸底壺等の土師器を含む川などを検出しており、北から南に向かって次第に流路が変わっていった形跡を認めることができたのである。

歴史時代の遺構

3PY7～3PT25の全域にわたって、表土直下には厚さ約20cmの褐色土がみられた。

この褐色土中には、須恵器・土師器・瓦器等の細片が含まれているが、溝・柱穴等の遺構は検出されなかった。（図版三—6）

3OA24～3OY24の調査地区内においては、明確な遺構として、3OR24地区で掘立柱建築遺構1棟を検出している。また、3

OA24～3OH24地区では、包含層である褐色粘土層より、数点の土師器・須恵器の細片のみが出土した。この包含層の下層は黄茶色砂質土で、3OI24～3OY24で遺構面となっている茶褐色砂質土層とはまったく異なった状態であり、遺構は見られなかった。また、3OI24～3OQ24地区では、L字形の落ち込みや、方形を呈する単独の掘り方敷力所を検出したが、いずれも建築物を想定することは不可能であった。



第9図 建築遺構柱穴群（3PY）

古墳時代の遺構

3 OR24地で検出した掘立柱 建築遺構は、桁行3間（柱間1.4m）で、梁行3間（柱間1.8m）以上の規模を有する南北棟の建物である。なお、この建物の掘立柱の掘り方内より瓦器の細片が出土している。その他の遺物としては、30U24区の包含層中より、奈良時代の土師器の杯数点が出土し、また屋瓦片も出土している。（図版三一・5～6）

3 OA24～3 OY24の調査地域では、3 ON24区の青灰色粗砂層中より土師器の脚部、磨滅した弥生式土器片等が出土したが、遺構はみられなかった。3 OA24よりY24にいたる層位は、3 OA24区で0.5mの堆積を持つ青灰色粗砂層が南西の方向から流入した様相を呈し、この砂層の東限はH24区で終えている。西限は調査範囲をこえ、さらに西へのびると考えられる。3 OH24～I24区では下層の暗青灰色粘土層がやや高かまるため青灰色粗砂は3 OI24区より東へのび、3 OS24区まで50m余にわたって、最大部で1m余の堆積を示している。3 OT24より3 OY24までは青灰色粗砂はみられず、青灰色粘土層がみられた。西方の青灰色粗砂は、3 OH24区の下面でTP1.1mを示し西へ行くほどゆるやかに下っている。なお西方の青灰色粗砂中から遺物は出土していない。東・西の青灰色砂層は5世紀後半に河川が南西から北東に分岐して流れていたことをあらわしている。3 PI24区では表土以下の各層および瓦器などを包含する褐色土層を掘り下げたところ、黄茶色砂層の上面で井戸の掘り方ならびに半截した木をくり抜いて使用した井戸枠の上部を検出した。褐色土層からは、須恵器片・土師器片が相当数出土し、他に屋瓦片も含まれていた。（図版二五・三・7～16）

井戸の掘り方は、井戸の四方を一边約2.3mの胴張りの方形に約80cm掘り下げ、その中央より20cm南寄り井戸枠を設置している。井戸枠は丸木を縦に分割し、くり抜いた枠の割れ目を巧みに合わせ

うめられたものであるが、南側の井戸枠は中央よりやや上方で帯状に幅5cm、深さ3.5cmのえぐりを内面に施し、東西の端部に幅3～4.5cm深さ1cmのえぐりを縦に施している。えぐりの両端は腐朽し中央部が残存しているのみであった。南側井戸枠の両端腐朽部の背後には2枚ずつの板材を立てかけていた。東端には、長さ61cm、幅27cm、厚さ2.5cmの板材と長さ59cm、幅18cm、厚さ2cmの板材を設け、西端には長さ51cm、幅20cm、厚



第10図 井戸遺構



第11図 庄内式土器出土状態

さ2cmと長さ53cm、幅18cm、厚さ2cmの板材を設置していた。この井戸枠はいずれも直径約60cm、厚さ7cm、高さ65～75cmの両用材を北東に傾いた状態で納置し、束材を背後から立てた後、埋設したと考えられる。井戸内からは上方の黒灰色砂質土からは、須恵器の無蓋高杯・杯、土師器の甕、小型の手捏の土器3点、また井戸底の青灰色砂層上からは、須恵器平瓶・長頸壺・直口壺、土師の甕、および長さ33cm、幅5cm余、

厚さ約3cmの板2点が出土した。なおこれらの土器からこの井戸は6世紀末と考えられる。瓦器その他を包含する褐色土を除去すると、3PY19周辺では、黄褐色砂質土がみられ、この上面から切り込んだ、直径約60cmの円形のピットを検出した。ピット内からは、土師器・須恵器の完形品を検出した。5世紀後半のものとして推定されるが、この時期に属する遺構としては、このピットをあげ得るのみで、他には何ら遺構を検出することは出来なかった。

3PY12～3PY16にかけては、褐色土下に暗褐色土がみられ、3PY12～3PY13では、東南から西北に向う幅約1.5mの溝を検出し、3PY13～3PY16にかけては、この暗褐色土中に庄内式の土器片を包含していることが明らかとなった。3PY15では、甕・小形器台等が一群となって検出されたが、遺構としては、上記の溝をあげ得るのみで、他に柱穴等は検出されなかった。3PY15の土器群は、暗褐色土下部、下層の暗青灰色粘土層上面で検出されたもので、この暗青灰色粘土層上面には、炭化物を含んだ黒色粘土がうすくみられ、南へ次第に下降して行く状態がみられた。庄内式の時期の生活面と推定される。

なお、3PY23～3PY25にかけては、暗青灰色粘土を切り込んだ状態で青灰色砂の堆積が認められた。この砂層中には、弥生時代前期～古墳時代にわたる土器片が含まれているが、須恵器は含まれていない。土器片の多くは、かなり磨滅しているが、土師器の内には、完形に近いものもあり、この時期に南東から北西に向かって、かなり幅の広い川が流入したことが明らかである。ただ、この川幅については東は3PY23で川岸を知り得るが、西側が、3PA24にまで続くものであるかどうかは、中央環状線内を調査していないため必ずしも明確でない。

＜田代克己・今村道雄＞

4. 弥生時代後期の遺構

3PY7～3PY9にかけては、褐色土下に黄褐色砂質粘土がみられ、この層を切り込んで、南東から北西へ向う2条の溝と、長軸をこの溝と同一方向に向ける幅約1.5mの土塼を検出した。内から出土する土器から、いずれも弥生時代後期のものと推定された。

3PY7では、黄褐色砂質粘土下の暗灰色砂質粘土中からも、弥生時代後期の土器を検出しているが、この層においては何ら遺構は検出されなかった。

なお3PY9～3PY13にかけては、弥生時代後期の土器片を含む、厚い灰白色粗砂の堆積が認められ、その底は約1.7m下の弥生時代中期の包含層上面にまで達していることが明らかとなっている。その縁辺をたどることから、南東から、北西に向かって流入したものであることが推定された。弥生時代後期にも僅約20mにおよぶ川が流入していたことが明らかである。

また今回調査対象となった地域のうち、西端の5BW1でも弥生時代後期の高杯を検出しているが、全体的にみて、極めて部分的なものであり、遺物も少ない。

3LY12～3LY25にかけては、第1層（古墳時代から歴史時代）の包含層および遺構面は以前に削除されており、調査の対象となったのは弥生時代中期の遺構面および包含層であった。さらに、調査の進行につれて、弥生中期の包含層を削って流れる一本の自然流路を検出した。

この自然流路は、青灰色の粗砂および細砂の堆積したものであった。幅は約10m、深さは肩部の確認できた部分から約1m程度の幅の割には浅いものであった。しかしこれはあくまでも確認可能部分についての考え方であって、以前にはもっと深かったものが、一時の氾濫によって肩部の大部分が削られてしまった可能性が強いと考えられる。流れの方向は、東南から西北に向かってトレンチを斜めに横断しており、今回の調査で検出した他の地区の川の流れときわめて近いものであった。

この流れの埋没土中から発見された遺物としては、弥生中期の土器をはじめとして、自然木等植物性の遺物も相当含まれていた。時期的には弥生中期の包含層を削って下の粘土層まで達しており、第4様式以後のものであろうが、土器としては弥生式土器のみしか検出できなかった。

＜田代克己・中西靖人＞

5. 弥生時代中期の遺構

3LY12～3LY25

地区の調査

当地区における弥生中期の遺構面は、北の端(3LY15～12)で大きく下って行き、生活面としての遺構は認められない。この傾斜は無遺物の粘土を底として青灰色の砂と粘土の交互に重なった包含層が堆積している。遺物は木製の槽の完形品をはじめとして比較的多く含まれており、その出土状態から瓜生堂集落のはずれに廃棄されたものの様であり、この傾斜が瓜生堂遺跡の北端部であると考えられる。そしてこの傾斜に対して、今回の調査範囲内においても一条の小溝が南から流れ込んでいた。この小溝は幅約1m、深さ20cm程度のものであり、底は一定ではなく凹凸が多い。溝内には畿内第3様式の土器を中心に、若干の石器・自然木を含んでいた。この溝は3LY18地区で調査範囲より東へ延びているようで、今回の調査外となってしまった。溝の東側肩部には杭または柵列を想定させる小さなピットがほぼ1.5m間隔に並んでいた。また西側にも溝の肩から下る傾斜面に一本の杭跡、およびやせた杭の先端部を検出した。これによって、これら小溝の両側には柵状のものが設けられていたものであろうと考えられる。また上述の小溝が3LY18地区で調査外に出る位置の西側、溝の西側肩部より約1.5m程度の位置にはシジミ貝を廃棄した方形プランを示す大きな穴を検出した。このピットは粘土層(青灰色粘土)を掘り込んでおり、底にはすべて開いた状態で貝殻が多量に埋まっていた。そしてこれら貝殻の上には炭化した稲束。藁等と第3様式土器片が多量に検出された。したがって貝殻の状態等からこのピットは住居区域に近い廃棄穴であると考えたい。

この廃棄穴の南約50cmには、外側の直径3m程度の円形の溝がある。調査範囲内にはその半分しか入らなかったため性格等は不明であるが、溝は南側で終わってしまっており、完全に円形に回るものではない。また内側の台地の直径は約2mを測るのみで住居跡等とは考えられない。また溝の内部より植物性ネット2点を検出した。

この円形周溝から南へ約10mには、2個のピット以外には遺構らしいものは何も認められなかったが、包含層からは又鋳の完形品を代表とする数点の木製品を検出した。さらに南へ、3LY21地区まで行くと、自然流路の北側の肩部まで続く幅約1.5m～2m程度の、北東から南西へ流れる溝



第12図 シジミ貝を含む廃棄穴

3PY1~3PY6

地区の調査

を検出した。この溝には、同地区を西北から東南へ流れる幅約50cm程度の溝が附随していた。これら2本の溝の両部には、禾本科植物の茎を平織にした敷物を各々1点ずつを検出し、また内面に原始絵画のある完形の鉢型土器等、多量の土器・木製品・獣骨が出土しており、時期的には第2様式から第4様式までが含まれていた。

当該調査地域は、その間に1本の道路と2本の用水路が横断している。このため、それら公共施設の付替工事が調査に先行して行なわれており、第1層（古墳時代以降）はおろか、弥生中期の包含層および遺構面までも一部分は破壊されており、また用水路からの漏水によって常時水に洗われる状態であったため調査は極めて困難な状況下で行なった。

3PY1地区は、自然流路の南側肩部にあたり、それ以外の遺構は何も検出できなかった。3PY2から3PY3地区においては、自然流路と平行に走る幅約1m、深さ25cm程度の溝を一条検出すると共に、礎板と思われる木を底にもつピットを一個検出した。しかしながらこれらの遺構も他に何らそれと結び付けて考える材料がないため、推定すらできない状態であり、今後隣接地区の調査をまちたい。時期としてはやはり弥生中期のものである。これより南へ約8mは、上が用水路になっており、その付替えの際に完全に遺構面が失われていた。3PY5から3PY6にかけては、多数の柱穴と性格の不明な不整形な溝、および方形プランの廃棄穴（3LY18地区のとは異なる形態）を検出した。ピット群で何とか関連性を発見しようと努力したが、小規模な面積内では相互の関連性はつかめなかった。したがってそれらに附随する廃棄穴や溝の性格も明らかではないが、ピットの規模、深さ等によって何らかの建物か、生活跡の存在が考えられる。遺物としては、ほぼ完形の田下駄の他、農耕具の柄の破片等の木製品、植物質遺物をはじめ、石鏃・石槍等の土器、畿内第3様式~第4様式の土器片等多数の遺物が出土した。

＜中西啓人＞

3PY7~3PY22

地区の調査

この地区における古墳時代ないし弥生後期の遺構は、そのほとんどがTP+2m~1.8で検出され、以下は、暗灰色粘土層あるいは青灰色砂層などの無遺物層である。TP+20~30cmに至って、弥生中期の遺物を包含する黒色砂質土層となる。この黒色砂質土中には、多くの土器その他の遺物が包含されているが、この層上面あるいは、層中においては、遺構は検出されず、下層の青灰色砂の上面

で、柱穴・溝その他の遺構が検出された。黒色砂質土包含層中には、上部から下部に至るまで畿内第2様式から第4様式の土器を含んでおり、層位的にも分けることは出来ずその大部分が再堆積したものと考えられる。したがって包含層下の青灰色砂上面で検出された遺構は、第2様式～第4様式に至る間のもが含まれている可能性があるが、各遺構に確実に伴って出土した遺物については、今後詳細な検討を加える必要があり、現在は結論を出すまでに至っていない。

3PY7から3PY19にかけて、多くの溝・土曜・小ピット等を検出している。

遺構面の高さは、3PY7でTP-15cm、3PY12までの間ゆるやかに下降し、3PY12のほぼ中央でTP-60cmとなる。3PY13では急激に上昇して-20cmを計り、南に向かってさらに上昇する。3PY17では+18cmとなる。3PY19南端では-30cmと下降し、3PY20～22では-90cmと急激に落ち込み遺構はまったくみられなくなる。

3PY7～3PY12にかけては、小ピット・不定形な土曜・溝等が検出されているが、その性格等については不明なものである。3PY9で検出された土曜中からは、両面朱彩された木片が出土している。

3PY13では、2本の柱根が立ったまま検出されたほか、第3様式の完形の壺が遺構面に接して検出され、住居跡の存在した可能性があるが明確でない。

3PY14～3PY15にかけては、直径30～50cmのやや大形のピットが群在し、内には木片を含むものが多い。木片の多くは皮のついたままの自然木とみられるものであり、明確な加工痕を残すものはないが、なかにはその端部に石斧で切られたとみられる痕跡を残すものがある。

3PY16と3PY18では、それぞれ幅約3mで、深さ約30～40cmの東西に延びる溝を検出している。両溝間約6mの内には、直径約10～30cmの小ピットが多く検出された。

3PS～3PY25地区において、青灰色粗砂層を除去し、青灰色細砂層・青灰色粘土層を掘り下げると黒色粘土層になる。当地区では黒色粘土層より上層観察用の群を残し、排水用の溝を南北両端に切って調査を開始した。黒色粘土層内には遺物の存在は確認出来

ず、下の黒色砂質土層中より弥生式土器の出土をみた。弥生式土器は第3様式～第4様式の土器片が大半を占めている。遺物は出土地区によって数量が大きくちがいが、3PS～3PU25区より出土した遺物が大半をしめ、3PV～Y25区からの出土遺物はきわめて少ない。

3PS25～3PT25地区では、やや南方向に西流する溝部幅約2.20m、溝底部幅1.30m、長さ6m以上、深さ約20～30cmで北側の溝底が一段低くなった状態を呈する溝である。この溝の東限は、調査区域外を北東の方向へ続くものと推定され、西限も3PI24区南端をかすめ調査区域外へ西流しているものと考えられ、その長さは50m以上続くといわれる。この溝内には、土器を多量に遺棄した状態で、水差形土器や壺形土器・高坏・甕・鉢形土器の各器型のものが出土した。なお壺をのぞく大半の土器は原状文・被状文・直線文などの各種櫛描文様、あるいは篋みがきだけの無文の土器であるが、一部の土器の口縁部には、数珠の凹線文を施文している。木器には、用途不明の木製品や木片が出土している。石器には石彫丁・石槍等の破損品が出土している。3PS25～T25区では、不定形の落ち込みが2カ所みられ、他に3PV25区より3PT25地区まで北西に流れる10m以上の溝状の遺構が検出された。この溝は肩部幅約1.3m、溝底部幅約1.30m、深さ約0.15mをしめし、溝内より無頸壺(図版三〇—26)・水差形土器・甕・鉢・高坏・壺などの土器、木器としては、踏みスキが出土した。なお、3PU25～Y25地区では、小型壺形土器・台付鉢、木器としては弓が出土している。(図版二八—14、三〇—25) 遺構のレベルは、3PS25～3PU25まで大体TP-0.7m前後を計り、3PV25区より3PY25、3PY22～3PY25まではTP-0.2mを示すことから、東が高く西の方に向かって低くなることがわかる。

＜田代克己・今村道雄＞

3OY24～3PH24 地区の調査

今回調査対象となった地点は、先に調査した中央環状線西側特殊マンホールの真西にあたり、築造される下水管渠が、マンホール部から西方の小阪ポンプ場に至る全長のうち約42mの部分である。調査に際して一辺5mを基準に地域設定した3OY24の一部から3PH24に至る南北約5m、東西42mの210m²の面積であるが、西側特殊マンホール部に接した3PH24は種々の事情により後に調査した。調査は盛土、無遺物土層等、不要土の撤去を機械力によって掘削し、東壁部において層位状態を記録作成しながら、これと並行

して発掘調査を進めた。その層位状態は次の通りである。

TP+3.4mを上面にした盛土に続き、60cmの厚みを有する暗茶褐色粘土質土層が存在する。それは少し粘着力をもった比較的土粒粗の粘土質土層で、少量の土師器の微片を包含していた。以下茶褐色砂層・暗茶褐色砂層・茶褐色砂層・灰白色砂層・青灰色砂層・部分的に認められる黄褐色砂層と層位においては明瞭な境界をなしながらもまったく遺物を包含しない砂層が堆積していた。

次の青灰色粘土層約20cmの厚みをもち、漸移的に南方に高くなっていく状態で推積し、その下層に約1mの厚みをもつ灰白色砂層の堆積を認めた。この灰白色砂層は上層の土粒が比較的粗く、下底に至るに従って細砂層となっている。そして青灰色砂質粘土層・暗青灰色粘土層・黒色粘土層が、各層約10cmほどの厚みをもって全体的に堆積しており、黒色砂質土層がこれに続いてTP±0mをほぼ上面として堆積しているのが認められ、土層中には多量の弥生時代中期の土器を包含していた。青緑色砂質土層は弥生時代中期の生活面であり、後述する溝や土壇等、多くの遺構が検出された。

さらに調査終了後、青緑色砂質土層より下層を観査地域に南北1m、東西40mの規模をもってトレンチを設定し、深さ約1.2mまで掘り下げた。その層位は部分的に堆積する層もあるが、基本的に青緑色粘土層・淡黄色砂層・淡青灰色砂層・淡黄色砂層(細)・淡黄色砂層(粗)・青緑色粘土層・黒灰色粘土層となっている。各層には何ら遺物を含んでおらず、下層部において少量の植物遺体を検出したにすぎない。

遺構は青緑色砂質土層上面に存在し、調査地区全域にわたって溝・ピット・土壇等、多くの遺構を検出した。

まず調査地区3PO24～3PG24の中央部において、東から、西北方向に至る溝が存在した。溝の両端が工事用鋼欠板によって切断されているため、北方部においてどの程度の規模を有し、どのような性格をもつかは不明であるが、西方北壁部において、幅約4.9m深さ約5mを計り、中間部では幅1.1m、深さ約15mであり、西方部より東方部に延びるにしたがって幅が縮少し、北側の肩において二段の落ち込みになる部分もあるが、その形態は梯形に近い形となっている。溝内からは多くの弥生時代中期(畿内第3様式～第4様式)の土器が検出され、また圧縮されたような形で、長さ約39cm大の種子を含んだヒョウタンと木製の鍬の先端部も認められた。この溝

の東方部両端に3PF24と3PG24において柱根の残存する2カ所の柱穴を検出した。

3PF24の柱穴は溝北側肩部より北1mの距離に存在し、口径約30cm、深さ約10cmである。また、3PG24の柱穴は溝南側肩部より2m南に位置し、その規模は口径約25cm、深さ約10cmを計るものである。

これらの外に調査地域全体に多くの大小各種のピットが存在しているが、その位置関係は不明瞭である。また溝の西端部南肩部に接した3PO24地点の南部において、幅85cm、深さ15cmを有する溝を検出した。その南側は工享用鋼矢板によって切断されているが、溝は長円形な環状溝的性格を有しており、その長径は約4mで、内部において浅いピット3カ所を伴っている。3OY24～3PA24地点南半部においても、東西方向に延びるもので、溝的性格をもった溝状遺構を検出した。溝とは断定しがたく、あえて溝状遺構とした。それは東側3PB24中心線部において南の方向に弯曲し、中間部では2段の落ち込みとなっている。地形的に全体が西方に高く、東方に漸移的に低くなっているため、肩部の標高は一定ではないが、西方部において約TP+7.5cmで、検出した溝底までの深さ54cm、東方部では肩部の高さは約TP+20cmで、溝底までの深さは約7cmである。南側が工享用鋼矢板で切断されて土器数個体分が出土している。さらに、この溝状遺構に隣接し、直径約25cmのほぼ同一規模のピット3基を検出した。

設定した区画の3PB24地点中央部では、検出した南北に延びる幅約1.5m～0.6m、深さ5cm～10cmの浅い落ち込みの両端に接して土壌が2カ所存在した。西側の土壌は、長円形で長径約1m、短径約65cm、深さ約14cmの小規模なものである。これに対して東側

の土壌は、かなり大きなもので、南側を鋼矢板で切断されているためその全長径は不明であるが、長円形を有した土壌で、残存部で長径1.9m、短径1.3m、深さ約10cmを計る。

以上が当調査区域において検出した主な遺構であるが、その相対的時期は包含層中、あるいは遺構面上において検出した多くの畿内第3・4様式の土器の示す年代、すなわち弥生時代中期に位置するものと考えられる。これらの遺構は先に調査



第13回 調査風景(3OY24)

した東方部より続く同一時期の遺構であり、東西特殊マンホール部の調査結果や、木調査地域において柱根を伴う柱穴の残存したことで、さらに昭和40年に発見された青銅製利器片が南方約60mの地点に位置することなどを考え合わせた場合、前記のように今回調査した地域の南東部一帯に住居跡遺構が存在するものと思われる。

＜北野 保＞

3 O A 24～3 O Y 24 地区の調査

3 O A 24地区から3 O Y 24地区の調査は、今回の第2次調査として行なったところであり、調査を継続中である。したがってその一部分(3 O A 24～3 O H 24地区)は未調査地域として現在まだ残っている。3 O I 24地区から東3 O Y 24地区までには、現在までに後述するように、方形周溝墓5基、土塚墓27基が検出され、瓜生堂遺跡の弥生中期の一大墓地の感を呈している。これら墓地の中には、数条の溝が南北方向に走っており、それらの溝に規制されるがごとく方形周溝墓と土塚墓が一線を画した状態で検出された。(図版二四参照)

それらの詳述は後節にゆずるとして、その位置及び関係は図版二四のごとくであり、土塚墓に関しては、3基乃至4基1単位の小ブロック的なまとまりが10グループ確認された。

＜中西靖人＞

6. 方形周溝墓と土壇墓

瓜生堂遺跡における今回の調査は、大規模な古代村落の中に一筋のトレンチを設定した様なるものである。したがって瓜生堂遺跡の村落構造・規模等に関しては、ほとんど明らかにすることができなかった。しかしながら社会構造に関しては一つの示唆的な遺構を検出した。それが方形周溝墓と土壇墓であり、またそのあり方である。従来より古代社会の社会構造を考える際には、当時の埋葬形態ももっとも明確かつ直接的な解答を与えてくれている。瓜生堂の埋葬形態もその例にもれず、当時の共同体構成員間のあり方ある程度まで表わしているのではなからうか。以下埋葬施設を伴った第2号方形周溝墓を中心に、それらの問題に関しても若干の問題提起を試みたい。

方形周溝墓は、図版二四のごとく3OA24から3OP24の間に、あたかも市松模様を想起させるがごとき状態で5基が検出された。これらのうち第4号方形周溝墓と第5号方形周溝墓の2基に関しては、調査当時盛土の存在を確認し得なかったが、残りの第1号方形周溝墓、第2号方形周溝墓、第3号方形周溝墓においては、遺構而上部に推積した弥生中期の包含層が、すでに起伏を示しており、かつ後述するがごとき寛棺及び供献と考えられる意の一部を包含層の上面において確認したことから、盛土の存在を考慮せざるを得ず、極めて注意深くその存否を追求した結果3基とも盛土を伴った方形周溝墓であることが明らかとなった。以下順を追ってその規模、構造の概略を説明する。

第1号方形周溝墓は、幅約1mの溝に囲まれた1辺長約6m程度の比較的小規模なものであり、溝の肩部と盛土中央部の比高差は30cm程度のものである。調査トレンチにはその南約 $\frac{1}{3}$ が含まれたのみであり、主体部その他の埋葬施設の存在は認め得なかったが、盛土除去後に地山を掘り込んだ土壇墓一基を検出した。しかしながら、この土壇墓は明らかに第1号方形周溝墓の盛土の下に存在し、同時的な遺構とは考えられないものである。残念ながらこの土壇墓内部よりは土器は出土せず、その時間的差については不明である。また、周溝内からは1個の甕が検出され他にも若干の土器片を認めた。この甕は周溝底部に密着しており、他遺跡の例からも供献された土器であると考えている。このように第1号方形周溝墓の中心部は調査範囲外に存在し、埋葬施設の単数・複数等不明な点が多々あるが、それらは今後の調



第14図 供献土器出土状態（第2号方形周溝墓）

査の結果にまちがいと考える。

第2号方形周溝墓

第2号方形周溝墓は、最
大幅約1m程度の極めて貧
弱な溝に囲まれた1辺長約9m程度の方形周溝墓
であり、溝の肩部と盛土最上部との比高差は1.2m
程度と推定される。この方形周溝墓は、最初の発
見当初から先述のごとく供献と思われる土器（図
版二七・五）と、第1号変棺が検出され、とくに供
献の土器は相当長時間にわたって風雨にさらされ

た状態で立っていたと思われる。この方形周溝墓も第1号のそれと
同様に調査範囲内にはその $\frac{1}{3}$ 程度しか含まれていなかったが、上述
の変棺をはじめとして他に3基の変棺と、1基の木棺を検出した。

木 棺

木棺は幅約40cm、長さ1m50cm程度の組合わ
せ式木棺であり、木質部は底板の一部及び北側側
板、蓋板の一部をとどめたにすぎず、木口板はその痕跡すら認め得
なかったが、内部より頭を東へ向けた人骨が検出された。大阪市立
大学医学部の専門隆助教授の教示によれば、人骨は頭蓋骨・大腿骨
が認められ、おそらく成人男子であろうとのことである。また取上
げの際に頭蓋骨部分より臼歯1本を検出したので今後より正確な判
断を下すことが出来るであろう。成人男子骨とすれば、その埋置さ
れた木棺の規模との間に問題を残すが、この問題に関しても後日人
骨の正確な計測結果によってより一層の考察を試みたい。その他に
は何ら木棺内部には副葬品は発見されなかった。木棺埋置の掘り
方は、木棺の底板のスケールよりやや広い程度に不整形な長方形
プランを示していた。底板と掘り方底部との面としての差はごく小
さなものであり、底板を入れるのに糟一杯の状態である。

第1号変棺

第1号変棺は、口径36cm、高さ61cmの甕
に口径約44cm、高さ27cmの鉢を蓋としてか
おせたままおしつぶされた状態で、主軸方向をN-14°-Eにおいて
検出された。甕及び鉢に関しては出土遺物の項で詳述することとし
て、そのマウンド内の位置及び掘り方についてみると、まず位置は
方形台地上面の西北角の地点にあたり、ここから溝へかけて急激な
傾斜地となる点にあたる。掘り方は南側に接して検出された第2号
変棺のそれを切り込んでおり、時期的に一番新しいものである。甕
の内部からは人骨その他の副葬品は検出できなかった。

第2号変棺は、第1号変棺の南側に第1号
第 2 号 変 棺 変棺と同様に鉢を蓋としてかぶせた状態で検

出された。この変は口縁部径 29cm、高さ約 48cm のものであり、鉢は口縁径 44cm、高さ約 29cm のもので、鉢には 櫛 插 き 平行線文、条及び口縁部には篋描きの斜線を部分的にほどこしている。この変棺は変の底部が銅矢板で切断されており、棺自体極めて無惨な状態で検出された。したがって主軸方向等不明な点が多いが、人骨・副葬品の存在した形跡は認められなかった。掘り方は先述のごとく第1号変棺によってその北側を切られており、不整形な円形をしていたと考えられ、掘り形の底は第1号変棺のそれよりはるかに深く、おそらく変はある程度まで立っていたと考える方が妥当であろう。

第3号変棺は、第1号・第2号のそれとは
第 3 号 変 棺 木棺をはさんで対峙する位置から同様の形態

(セット関係)で検出されたが、第2号変棺とは逆に鉢の大部分が銅矢板の犠牲となっており、変も口縁部の大部分を欠いていた。しかし変の底はかろうじて破壊をまぬがれ、盛土の中へ立った状態であった。したがって第3号変棺も第2号変棺と同様にある程度立て置かれていたと考えている。また人骨・副葬品は前二者と同様その形跡すら認められなかった。さらに時期的な問題になるときわめて判断がしにくい、木棺の東側掘方を切った状態から、少なくとも木棺よりは後のものであろう。しかし、前二者との時間的な差を云々する材料は何もない。

第4号変棺は、第1号変棺の北東に掘り形の一部を接する位置にあり、主軸方向を N-84°-W とほぼ木棺と同一方向をもって検出された。この変棺は他の3基が鉢を蓋として使用しているのに対して、蓋を伴わずに変のみのものであった。変は第1号変棺と同様におしつぶされた状態であり、内部からは人骨その他副葬品のたぐいは何も検出できなかった。時期的には、木棺と同時期と思われる。何故なら、他の3基の変棺が黒色土層の包含層を除去しないしは除去する途中で検出したのに対して、第4号棺は木棺と同様に盛土の上部第1層の下から出土しており、最終的なマウンドの表面ではその掘り方すら認められなかった事実からである。しかしながら木棺との時間的な差は明確ではない。

供献されたと思
われる土器

第2号方形周溝墓には、供献されたと思われる土器が亀裂を生じてはいるが、ほぼ完形でマウンド東北端部及び西北溝中より検出された。この2個の器種はいずれも壺であり、双方とも確実にその位置に最初から置かれていたとしか考えようがない。このことは供献の方、土器の配置等に関してこの方形周溝墓においては、溝中・マウンド上のどちらにも置くものであることを示しており、一定のルールの存在は考えられない。また、マウンド東北端部にあった土器(図版二七-5)は、腹部に焼成後外側から打ち砕いた不整形の孔があり、従来腹部に孔の穿たれている土器はすべて棺としての機能を考慮してきたが、供献される土器であってもよいとの一つの可能性を示唆していると思われる。最後に盛土の断面は図版二四のごとくであり、ベースとなる地山は青灰色の粗砂であった。そしてこの上に極めて不規則に砂及び粘質土を盛り上げてマウンドを築いたものであり、埋葬施設は明らかにこのマウンド築造後に計画性をもって掘られていると考えらる。

第3号方形周溝墓は、第2号方形周溝墓のさらに西に存在する。この方形周溝墓は幅約

70cm 程度の溝で囲まれた一辺長約8m程度のものであると推定されるが、調査範囲内にはそのわずか1/4が含まれたにすぎず、埋葬施設等は検出できなかった。ただ供献されたと思われる土器が1個体マウンド南東端部に口縁部を欠いた状態で検出された。この土器も器種は壺であるが、第2号方形周溝墓のマウンド上にあったそれとは異なり、腹部その他に穿孔された形跡は認められない。しかし盛土の状態に関しては極めて第2号のそれと類似しており、当時の盛土のし方があまり規則的なものでなかったことを示唆していると考えたい。

第4号方形周溝墓は、今回の調査に因しても第1次・第2次と分けて行なわざ

るを得ず、さらに鋼矢板の壁によって東西1/2ずつ隔てられ、かつその1/2しか発掘出来なかったで、この時点での盛土の存在は認められなかった。しかし幅約1m程度の周溝内には寛・高杯・壺等比較的多量に検出されており、これらの点を考え合せると、やはり方形周溝墓と考えるのが妥当のようである。しかし主体部をはじめとして埋葬施設の存在は認められ



第15図 供献土器出土状態
(第5号方形周溝墓)

ず、今後の調査の結果にまちたいと考える。

第5号方形周溝墓

第5号方形周溝墓は、第4号方形周溝墓の西に溝の東北角を接するがごとくに存在する一辺長約8m前後の方形周溝墓である。この方形周溝墓は幅約1m程度の比較的深い溝をもっており、その内部には高杯(図版二九-12)、壺(図版二七-4)、鉢(図版三〇-29)、等がほぼ完全に近い形で検出された。そして溝の内側がやや南へ高くなっていたが、この溝より1m程度のみしか調査は出来ず、方形周溝の北の溝を掘った様な状態である。したがって本当の意味での方形周溝墓としては確認はできず、今後この南側を調査する機会への注意事項として、ここに示しておきたい。

A 土 墳 墓 群

1 号 土 墳 墓

当土墳墓は、2・3号土墳墓とともに一群をなし3基の中では最も新しく、3号土墳墓がもっとも古い。2号はその中間である。1号土墳墓は頭を北西の方向に向けて埋葬されたと推定される。土墳墓の長軸は北西の方向を指し、長さ1.10m～1.40m、幅50～70cm、深さ北西で30cm・南西で10cmの胴張りの長方形をなし、底は、北西側の墓壇肩部からやや急に落ち、そこから南西に向って、ゆるやかな傾斜をなしている。土器片2点の出土をみたが、土壙墓と直接に関連するものか不明である。

2 号 土 墳 墓

当土墳墓は南半部を銅矢板にて切断されていたため、その全容を知りえないが、知りえた北半部のみを記すと、当土墳墓は頭を北方向に向けて埋葬されたと推定される。墓壇は長さ80cm以上、幅50cm、深さ20cmで、底はゆるやかな傾斜をなし、南の方が低い。なお墓壇内への流入土中に半分焼け残った竪杵片が出土した。

3 号 土 墳 墓

最初に営まれたこの墓壇は、北北東に頭を向けて埋葬されたものと推定される。土墳墓の南半分は銅矢板に切断されていて不明である。長さ1.30m以上、幅約50cm、深さ20cmである。底部は北から南の方へゆるやかに下っている。なお上記3基の土墳墓は1つの大きな落ち込みの中に設けられたものである。

B 土 墳 墓 群

4 号 土 墳 墓

当土墳墓は5号・6号土墳墓とともに3基で一群をなし、4号土墳墓が本群内のもっとも新しい土墳墓であるが、5号・6号土墳墓の新旧関係は確認でき

なかった。4号土壙墓は南西から北東の向きに営まれており、長さ約1.9m、幅1.4m～0.9m、深さ15～25cmの計測値をしめし、南西側は幅が広く、墓墳の底は少しくぼんだ形状をなしている。1号土壙墓の北西4mの地点に本群はあり、本群の3基は東から西へ8m余の墓域をしめ、本土壙墓は北東向きに、5号土壙墓は東向きに、6号土壙墓は5号土壙墓の西1.8mの地で南向きにそれぞれ造られている。

5号土壙墓 当土壙墓は頭を東向きにして埋葬されたと推定され、東西の長さ約1.7m、幅50cm～90

cm、深さ15～30cmを計り、東の底が高く西の底の方がより低いが、底はゆるやかな傾斜をなしている。

6号土壙墓 当土壙墓は本群の西端に位置し頭を南方向にして埋葬されたと推定される。墓墳は長さ

2.1m、幅1.1m、深さ15cmを計り、南墳底より北墳底へゆるやかに5cmの差の傾斜が認められる。

C 土壙墓群

当土壙墓群は、7号・8号・9号・10号土壙墓とともに4基で一

群をなし、7号土壙墓は南流する溝に直交する形で造られている。

その為7号土壙墓内には溝内に堆積したのと同様の灰層がレンズ状に薄く堆積している。墓地内のこの溝は上端幅2.05～1.50m、下端

幅1.40～0.8m、最深部0.5mを計るかなり大きな溝であった、この溝内からは節描文を有する各種の盃形土器・甕形土器・水差し形土器

・高杯形土器・鉢形土器等の破片と、木製品1点がともに出土したが、盃形土器の口縁部に凹線文を施しているものも数点出土したこ

とから第3～第4様式の時期と考えられる。また本群の遺構の前後

関係を見ると、最初に造られた土壙墓は西の10号土壙墓と考えられ、それから南々東へ1mの位置に9号土壙墓が造られた後8号土

壙墓が9号土壙墓の北辺を切って造られている。その後さらに7号土壙墓と溝が同時に、あるいは土壙墓の方が溝の構築された後に造

られたものであろう。しかしその時間的な差は少ない。

7号土壙墓 当土壙墓の墓墳は長さ1.90m、幅60cm～90cm、深さ30cm～50cmで底は東の方がや

や低く、平面形は西半部がほぼ平行四辺形をなし、中央部から丸み

をもちながら南西の方へ広がって東側壁で終っている。墓墳の4壁はほぼ垂直の状態をなし、東側壁と南側壁の一部にかけては底より約25cmの位置のところで長さ70cm、幅10cmの櫛状の設を造っている。

当土塚墓は主軸を東西に有しているが、調査しえたのは南半部のみで、北半部は、鋼矢板に切断されていたため未調査である。南半部から知りえた当土塚墓は長さ1.2m、幅60cm前後、深さ15cmを計り、底はほぼ平坦である。詳細な観察は不可能であった。

9号土塚墓は8号土塚墓によって北側壁全体を掘削されていたが、長さ1.5m余、幅90cm、深さ20cmで平坦な底を示し、平面形は隅丸の長方形をなしている。

当土塚墓は、主軸を東西にとると推定されるが、北半部は鋼矢板に切断されているため詳細は不明である。調査しえた南半部のみについて記すと、東西1.5m、南北90cm、深さ40cmの計測値をしめし、底の北隅の一部が10cmばかり段状をなして高まっているが、底の大部分は、平坦である。三方の側壁、特に南壁は垂直に近い。

D 土塚墓群

本土塚墓群は、10号土塚墓群の西2mの位置に主軸を北東から南々西に取る11号と主軸を南から北にとる12号・13号土塚墓の3基で一群をなし、11号の西へ1mの位置に12号土塚墓、さらに西へ0.5mの位置に13号土塚墓が12号土塚墓の南西角に接するかのごとく造られている。

11号土塚墓は最大長1.90m、最大幅1.10m、深さ0.12mを計り、土塚墓上面に土器がみられ、平面形は隅丸の圓張りの長方形を呈し、底は平坦である。なお柱根が1本検出されたが、これは後に打ち込まれたものである。

本土塚墓は、11号土塚墓と並列するかのごとく造られ、最大長1.64m、最大幅0.92m、深さ0.16mを計るが、平面形は角に丸みをもたせた圓張りの三角形を呈している。底は平坦である。

12号土塚墓の南西隅と本土塚墓の北東隅とが接するかのよう存在し、主軸は南から北にとる。墓南半部分は鋼矢板に切断されていて詳細はわからない。長さ80cm以上、最大幅85cm、深さ10cm、底の中央がやや凹んだ状態である。平面形は、隅丸の圓張長方形である。

E 土塚墓群

本土塚墓群は14号・15号・16号・17号土塚墓の4基が順次切り合って造られたもので、最初南に17号土塚墓が造られ、その後16号

土原墓が、先の墓の北部を壊し、さらに15号土原墓が先と同様に北部に造られ、最後に14号土原墓が北に造られたことを物語っている。しかし14号土原墓の北半分は銅矢板で切断されているため、14号土原墓の北にさらに土原墓が連なる可能性もある。

14号土原墓 本土原墓は、主軸を北北西から南南東にとる土原墓で長さ50cm以上、幅60cm、深さ10cmを計るが北半分は調査不可能であった。

15号土原墓 本土原墓は東から西に主軸をとる土原墓であるが、中央部を14号土原墓によって壊されている。本土原墓の残存部の寸法は長さ1.0m、幅70cm、深さ20cmで、平面形は不整の楕円形を呈している。底は平坦である。

16号土原墓 本土原墓は主軸を北々西から南々東にとり長さ150cm以上、幅1.18m、深さ30cmで底は中央部が少し窪んでいる。平面形は不整形な隅丸長方形である。

17号土原墓 主軸を北西から南東にとり、長さ1.20m以上、幅0.67m、深さ10~20cm余を計る長方形の墓域である。底は南東から北西へゆるやかに下っている。

F 土原墓群

本土原墓群は、17号土原墓の西1.5mに位置する18号と、19号・20号土原墓の3基で一群を形成している。そして18号は新しい土原墓であり、19号は中間に、20号はこの群の中でも古い土原墓である。

18号土原墓 本土原墓は主軸を南南西から北北東にとり、長さ88cm、幅50cm、深さ10cmを計り平面形は銅張りの長方形で、底は北西から南東にかけてゆるやかに下っている。墓域の規模からすれば小人用の墓域と考えられる。

19号土原墓 墓域の主軸を北東から南西にとり、長さ1.20m以上、幅1.08m、深さ24~50cmを計るが、南端部近くを銅矢板で切断されていたため、詳細はわからない。底は北東から南西にむかってかなりつよく下っている。平面形は銅張りの長方形である。なおこの墓域は20号土原墓の南西の一边を切っている。

20号土原墓 当土原墓は主軸を北東から南西にとる墓域で、長さ1.0m以上、幅80cm、深さ25cmを計り、底はほぼ平坦である。平面形は長方形をしているが、南西部は19号土原墓によって掘壊されていたため全容はわからない。

G～J土墳墓群は現在なお発掘中であり、詳細な位置関係・前後関係は、まだ調査中だが、その存在位置と基数のみを記しておきたい。

G 土 墳 墓 群

本群は21号・22号・23号土墳墓の3基からなり、もっとも新しく造られた墓壇は、22号・23号土墳墓を切っている21号土墳墓であるが、22号と23号土墳墓間の新旧関係はわからない。なお23号土墳墓は小児用の墓壇と考えられる。

H 土 墳 墓 群

本群は、24号土墳墓1基で1群を形成すると推定される。平面形は長方形で、主軸は北々西から南々東にとっている。墓壇の規模は長さ約1.30m以上、幅約60cmである。

I 土 墳 墓 群

本群は25号土墳墓一基で形成すると思われる。蛇行しながら南流する溝の底に、溝と平行して造られている。溝と同時期に掘られたものであろう。

J 土 墳 墓 群

本群は26号・27号土墳墓の2基で一群を形成しているものと推定される。いずれも南から北に主軸をとり、長方形の平面をなしている。

最後に今回の調査、とくに方形周溝墓と土壇墓のあり方について簡単な考察を加え、若干の問題を提起してみたい。今回の調査において検出された5基の方形周溝墓のうち、埋葬施設を伴って発見されたのは第2号方形周溝墓のみであった。その他のものは盛土及び周溝は認め得ても、主体部たる埋葬施設の検出は出来なかった。したがって、方形周溝墓の基本的な形態を論ずることは極めて危険であるが、埋葬形態の一部を知り得た第2号方形周溝墓より復元的に考えるなら、第2号方形周溝墓の今回の調査範囲内に含まれた $\frac{1}{2}$ 程度の部分にすでに少なくとも5体の被葬者の存在が認められ、且つその時間的な差もある程度明らかになったことになる。また掘方は相互に切り合っていることもあるが、直接に棺本体を破壊しているものではなく、その計画性または規則性を想起させるものである。この様な5体埋葬を残りの列にも適用出来るとするなら、少なくとも当方形周溝墓には10体以上の埋葬が想定され、且つ中心部にはさらにもう1基以上の木棺墓（中心的被葬主体）の存在することをも推定させるものである。この様な埋葬施設のあり方からみれば、上述の規則性乃至計画性とあいまって極めて家族的なものであると云えるであろう。このことは、前節で触れた土壇墓のグループ的なまとまりと共に、さらに一層その色彩を強めていると考えている。

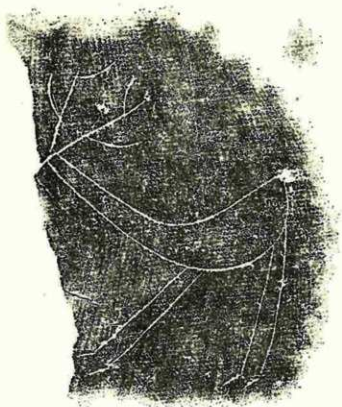
上述の様な第2号方形周溝墓の形態が、他の周溝墓にまでいえるか否かは今後の調査結果を待ちたいと思うが、瓜生堂遺跡においても畿内の他遺跡の例にもれず、弥生時代中期には共同体成員間の隔差が生じていたことを認めると共に、その差のいかなるものであるかを今後とも検討していきたいと考えている。しかしながら調査の終了をみない現在、あまり早急な仮説の提示はさしひかえたい。

さらにもう一つ付け加えておきたいことは、従来不明とされていた方形周溝墓の盛土（マウンド）の存在を確認し得たことである。方形周溝墓が爆発的に発見されている最近、大阪府・安満遺跡、茨城県・須和間遺跡の例からすでに盛土の可能性が示唆されていたが、今回の5基の方形周溝墓に於いて盛土の存在が確認されたことは、従来より問題となっていた埋葬施設の検出できない方形周溝墓の本来の姿を想定することも可能になり、このことはさらに埋葬施設を検出できないという問題に対して極めて決定的な解答を与え得るものである。今後の方形周溝墓の調査に関しても、積極的な資料として考慮していかななくてはならないものとなるであろう。

＜中西増人・今村道雄＞

IV 出土遺物

1. 弥生式土器



第18図 甕に描かれた鹿

今回の調査において出土した弥生式土器としては、畿内第2様式から、第5様式の土器がある。量的にみると、第3様式の土器が大部分で約80%、ついで第4様式の土器が約10%あり、第2様式と第5様式は少数である。

第2様式の土器は、セット関係はみられず、実用的な甕のみである。このことは、甕の方が、壺に比べて、より第3様式の時期までの持続性が強いと考えてよいのだろうか。

第3様式から、第4様式にかけては、凹線のみをもつ鉢(図版三〇-29)、壺の口縁などが出土しているが、この間の移行は今後の検討を要する。しかし、第2様式から第4様式までが同一包含層であるため、様式間の接点を追求するのは困難である。

第4様式と第5様式の層位は、1mもの間隔があり、その間の層位の時期的な流れも、今後の問題である。

第5様式の土器は、タタキ目のある甕(第18図)と高杯(第18図)などの数点である。



第17図 鉢内面に描かれた鳥

量的に多い第3様式の土器は、形態・文様の種類も豊富である。

壺A（『弥生式土器集成』による）の口縁部だけをとりあげてみても4形態に分けることができる（河内市教育委員会『鳳生堂遺跡』昭和41年による）。口縁端面には櫛描文やその他円形浮文などの緻密な反復による文様が施されている。

壺Aの口縁部の4形態を、今一度前掲書から抽出すると、

図(15)(16)－口頸部が漏斗状に開き、口縁端が肥厚し、そして波状文・簾状文・凹線文・刻み目文あるいは無文と刷毛目整形をしている土器である。

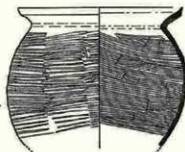
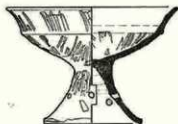
図(17)～(21)－口頸部が漏斗状に開き、口縁部において上方と下方へ広く端面を作った土器である。製作方法は、まず下方へ粘土帯をつけて整形したもの、上部に粘土帯をつけて整形し、端面に波状文・簾状文・扇形文・斜格子文・刺突文、それに図(20)の円形浮文、図(19)の列点文など、裝飾に重点を置く土器がある。

図(22)(23)－口頸部が漏斗状に開き、口縁部において上方に立ち上らせ、受口状に製作した口縁端面に扇形文・簾状文・波状文・凹線文・無文、それに図(22)の刻み目、列点文、図(23)の円形浮文を置く土器である。

図(24)－口縁端部が下方に張り出し、幅の広い裝飾帯をもつ土器である。口縁端面に凹線文を施し、その上に刻み目、円形浮文を置いている（摂津の土器と考えられる）。

当時の櫛描文の最盛期をうかがわせるが、さらに胴部の文様も合わせて、河内の個性的な土器が第3様式で一時に開花した感じがする。その他、櫛描文や凹線文の間にヘラによる縦の線、高杯の口縁上端面に放射状のヘラによる線など、張形を兼ねての文様もみられる。

地域的にみると、図(24)の壺の他に、口頸部下のしまったところ



第18図 弥生時代後期の土器

に断面三角形の貼り付け凸帯をもつ完形の椀状の壺(図4)、口縁内円周に三角形の貼り付け突帯をもつ近江の土器が出土している。

胎土は、河内の土器には、黒雲母・金雲母が含まれ、茶ないし黒褐色を呈し、一見して他の地域との判別ができる。今回の調査では、雲母を含まず、色も白っぽい土器や赤褐色の土器が含まれており、これらの土器の製作された地域を追求する事も必要である。河内の生駒山ろく地帯と、河内平坦部の土器の胎土の相違は、藤井直正氏が『河内考古学3』で指摘されている。この胎土の比較研究と共に、従来から櫛描の簾状文の櫛目原体が長く、幅の狭い文線を最初と最後の接ぎ目もわからないように緻密に施文されているのが河内の土器の特徴と言われているが、櫛目原体が短かく、幅の広い文線を施した壺(図3)があり、同じ河内の内部でも施文による地域性の追求も必要であろう。

本遺跡の土器は、第2様式から第5様式にわたって、内外面ともヘラミガキが顕著で、質も堅緻なため光沢をもつ。また櫛描文の間をヘラミガキしている。

絵画文のある土器が2点出土している。その1つは口頸部下に貼け付け凹帯をもつ壺胴部にシカの絵が描かれているもので、角まで表わしているのは珍しい(表紙カット・第16図)。

鉢(図30・第17図)は、内面に鳥が魚をくわえているような絵が描かれており、胴下部から、底部にかけて1個の穿孔がある。飾り物として使用されたものか、単なる鉢か、用途は不明である。

以上、本遺跡出土の弥生式土器の概観を記したが、現在整理が完了していないため、とくに完形に近い土器を表示してみた。今後、これらの土器を整理する中でいろいろな問題点が解明できると思う。

＜曾我恭子＞

2. 石 器

本遺跡から出土した石製品には、工具としての石斧、武器としての石鏃・石槍や、そのほか石廬丁・紡錘車、不定形の刮片石器などがある。いずれも畿内第2様式～第4様式の遺物包含層から検出されたものである。

調査面積にもよると考えられるが、その数は少ない。

大型刮刃石斧 完形品は今回の調査では検出されていない。

(図版三五-9)は、真半分に割れ、両面ともに大きく剥離し、刃部には刃こぼれの後になお強く摩痕が残っている。側面にも何かをたたいたとみられる痕跡が残っている。石斧として使用されなくなっ

種類	種別	差	差	差	差	細 差	小 型 差	カ メ	カ メ	カ メ
法 量 (cm)	口縁径(最大値) 腹径	欠損のため不明 36.1(現存値) 28.4 7.7	欠損のため不明 30.2(現存値) 23.6 6.7	23.7 43.8 27.8 6.6	22.2 40.3 30.7 6.9	口頸部欠損のため不明 15.1(現存値) 18.9 4.9	5.55 9.9 10.4 3.95	13.3 23.1 16.5 5.75	12.3 15.9 13.0 6.0	16.9 14.5(現存値) 18.8 欠損のため不明
出 土 地 区 土 器 番 号	30×24 4	3 L Y 16 3	第2号方形周溝墓 5	3 P Y 13 6	3 L Y 22 7	3 P V 25 14	3 L Y 22 16	3 P Y 11大P1:3 9	3 P Y 7 第19図	
口 文 様	・口縁欠損 ・頸部は斜めにひろがる	・頸部はまっすぐ立つ、 I 頸部上半は欠損	・斜めにまっすぐ横がった 頸部に外反した口縁、端面は 下に折れ曲る。	・太い円筒状の頸部に外反す 口縁をもち、端面は下 に折れ曲る。	・欠損	・まっすぐ立つ頸部に、内 側に隙をもち斜面にひろが る。口縁をもつ頸面はいい	・口縁部は外反し、端面は 矩形をなす	・I 頸部建くの字形に外反 し、内端は少し立ち上りを見 せる	・わずかな頸部に斜めにひ ろがるI 頸部で、立ち上りを もつ端面は矩形をなす	
頸 部	・口縁下部に前三角形の貼 り付け帯等を2本もつ ・頸部は縦方向に細かい刷 毛目、凸条付近は横ナデ	・頸部下に置状文	・I 頸部隆起、頸部に直線文	・口縁隆起に置状文 ・頸部に直線文1条と置状 文	・無文	・細かい刷毛目と指成形	・指成形	内外とも横ナデ	内外とも横ナデ	内外とも横ナデ
肩 文 様	・肩から胴上半部にかけて 刷毛目の上に直線文、波状 文を交互に4条ずつ繰り返 している	・肩部長のだ円形	・肩部は太く、腰が狭く なり、急に曲って底部につ づく	・線形に近い	・腰は強くはり出す	・そろばん玉に近い	・肩からすくひろがり、胴 部のはり出し、ほぼだ円形 をなす	・なだらかにひろがるが、 あまり胴部ははり出さずそ のまま底端までつづく	・腰部に近い胴部、胴下半 部は欠損	
胴 部	・胴上半部は縦方向に刷毛 目、下半部は横にヘラミガ キ	・胴下半部は横、斜めにヘ ラミガキ（ヘラミガキは5 単位に分かれる）	・肩から胴上半部に頸部 につづく置状文、数後に第 二置状文1条	・胴から底部にかけて、下 向きの弓状をなしたヘラ ミガキ（6単位）	・下半部横方向にヘラミガ キ	・指成形 ・下半部はヘラミガキ	・肩から胴上半部は斜めに ヘラミガキ ・下半部は底に向ってヘラ ミガキ ・上半部へう割り	・口縁すく下の両側は横ナ デ、その上から縦にヘラミ ガキ	・横、斜めに叩き目	
底 部	・胴部からのヘラミガキで 胴部の縁がそのまま底部 につづく	・器面と同じ厚さ	・器面と同じ厚さで得い	・底をヘラミガキしている	・底をヘラミガキしている	・底部の縁線は丸味をもつ	・器面と同じ厚さ。底をヘ ラミガキしている	・器面と同じ厚さ	・欠損のため不明	
色 調	・黒褐色	・黒褐色	・黒褐色	・茶褐色	・淡灰色と黒褐色 ・内は灰褐色	・黒褐色	・茶褐色 (内) 黒褐色	・茶褐色 (内) 黒褐色	・茶褐色	
胎 質	・微粒含む	・0.1～0.5mmの砂粒含む 黒雲母	・0.1～0.5mmの砂粒含む 金雲母	・0.1～0.5mmの砂粒少量含 む 黒雲母	・0.1～0.3mmの砂粒含む 金雲母	・0.1～0.2mmの砂粒少し含 む 黒雲母	・0.1～0.3mmの砂粒含む 黒雲母	・0.1～0.2mmの砂粒含む	・0.1～0.5mmの砂粒含む	
備 考	・胴下半部に煤附着 ・第5号方形周溝墓の供献 土器	・胴部中央に黒斑 ・胴一底部にかけて煤附着	・胴部中ごろに黒斑 ・胴下半部に煤附着 ・胴下半部を外から穿孔 ・第2号方形周溝墓の供献 土器	・胴下半部から底部にか けて鋭い管状の黒斑		・全面に煤附着	・全面に煤附着	・口縁から胴にかけて黒斑		

検査	種類	無 鉛 塗	無 鉛 塗	付付無鉛塗	把子付コップ	把子付コップ	鍍	鉄	鉄	鉄	水 素	カ メ	鉄
法 規 (mm)	口 径	10.8	12.3	15.2	7.7	10.7	8.8	14.8	14.15	27.3	欠損のため不明	36.2	43.8
	底 性	14.3	18.2	16.6	5.65	5.15	2.6	6.5	8.7	15.5	17.4(現存値)	61.2	27.1
		14.85	20.4	17.8					15.5		19.0	41.5	46.0
		5.4	6.1	9.5	3.1	4.2		5.9	5.8	9.2	5.5	10.0	8.5
出 土 地 点		3 P P 10	3 P T 25(溝内)	3 P U 25	3 P F 24	3 P Y-11	3 P F 24	3 L Y 23	3 P Y 13	30×24	3 P T 25	第 2 号 方 形 鋼 溝 溝	第 2 号 方 形 鋼 溝 溝
品 番 番 号		27	26	25	31	32	33	30	28	29	8	1	2
I I	形 状	・短く外反する口縁をもち、口縁下に孔1対2組。 ・口縁端面は丸い。	・段上り口縁をもち外反をもち、口縁下に孔1対2組を2組。 ・口縁に刻み（部分的）。	・口縁は内方向にのび、端面は丸く終る。 ・口縁にナデによる凹線1本。	・口縁面に斜めに鋭角の口縁部。 ・口縁下に直線文を施しているが1周せず円周状で残っている。 ・口縁外面に環状文部分的に列記文になる。	・わずかに内寄する口縁部。 ・口縁上端に細かく不規則な刻みをもち、口縁外面に環状文部分的に列記文になる。	・笠形の蓋。 ・口縁端は丸く終り内側に溝をもつ。 ・2孔1対2組。	・直口の口縁部でやや内寄する。 ・口縁端面に刻み目。	・口縁端面が外方に傾いて下方にのみ丸く終る。 ・口縁下側に凹線4本。	・口縁端面が内に傾いて下方にのみ丸く終る。 ・前部下に列記文。	・欠損のため不明。	・口縁部は外反し、端面は外側下方に折り曲げられている。口縁内側には十字型で溝をもつ、口縁端面は垂直。	・口縁端面を外側下方に折り曲げた後、口縁をもつ。 ・口縁端面に環状文。
	文 様												
	断 面 形 状 (外)	・口縁の表面ハクリのため不明											
	部	(内) ・横ナデ	内外とも横ナデ	内外とも横ナデ	・細かい縦毛目	・横に縦毛目	・縦毛目	内外とも横ナデ	内外とも横ナデ	内外とも横ナデ	内外とも横ナデ	内面とも横ナデ	横ナデ
器 文 様	形 状	・ほぼ球形で胴が丸くなる。	・胴が強くはみ出す。	・球形に近い胴部。	・コップ状であるが底部から斜めになだらかに広がる程度の把手（欠損）がついている。また把手の部分から欠損している。	・底部から斜めになだらかに広がる程度の把手（欠損）がついている。また把手の部分から欠損している。	・なだらかなカーブの湾曲した胴部。	・胴上半部は直感に立ち、下半部は急に曲って底部につづく。	・胴上半部は直感に立ち、下半部は急に曲って底部につづく。	・胴上半部は直感に立ち、下半部は急に曲って底部につづく。	・胴上半部は直感に立ち、下半部は急に曲って底部につづく。	・胴上半部は直感に立ち、下半部は急に曲って底部につづく。	・胴上半部は直感に立ち、下半部は急に曲って底部につづく。
	文 様	・肩から胴の上半部に直線文3条。 ・文様の間とその上から横にヘラミガキ。 ・文様の下の斜めにヘラミガキ、部分的に強く磨かせる。	・口縁下側のほうに出た部分までから環状文と直線文波状文を交互に繰り返す。 ・胴上半部は縦方向にヘラミガキ。	・口縁下側から凹線4本。 ・口縁上部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・口縁下部は内外ともに磨きに縦毛目、その上に横にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。
	断 面 形 状 (外)												
	部	(内) ・部分的に横方向にヘラミガキ。 ・下半部は横にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。	・上半部は縦にヘラミガキ。 ・下半部は縦にヘラミガキ。
底 部	形 状	・丸欠損。 ・指成形で底部をしめている。 ・底はナデのあとあり。	・スズなどで装飾が強い彫部をもつ端面は底はナデのあとあり。	・口唇をなさない（把手の部分から） ・底部まで欠損がある。	・底をヘラミガキしている。	・底をヘラミガキしている。	・胴部スリより底に向けて穿孔（1個）。	・底面はほとんど欠損。	・底面はほとんど欠損。	・底面はほとんど欠損。	・底面はほとんど欠損。	・底面はほとんど欠損。	・底面はほとんど欠損。
	文 様												
	断 面 形 状 (外)												
	部												
色 調	色 調	・淡褐色 中核は赤褐色	・褐色	・褐色 内側は茶褐色	・黒褐色（赤茶・黒がまざる）	・黒褐色	・褐色 内側は黒褐色	・褐色	・淡褐色 中核は褐色	・淡褐色	・茶褐色	・黒褐色	
	胎 土	・0.1~0.2cmの砂粒多く含む	・0.1~0.2cmの砂粒含む	・0.1~0.2cmの砂粒含む	・0.1~0.3cmの砂粒少含む	・0.2cm砂粒少し含む	・0.1~0.2cmの砂粒含む	・0.1~0.5cmの砂粒含む	・0.1~0.5cmの砂粒含む	・0.1~0.2cmの砂粒多く含む	・0.1~0.3cmの砂粒含む	・0.1~0.5cmの砂粒含む	・0.1~0.5cmの砂粒含む
	質 精												
	備 考	・胴部中頃から底部にかけて黒斑	・円板状無法 ・胴部と脚部スニに黒斑	・口縁部の一部に黒斑	・内外ともヘラミガキで装飾をもつ	・内外ともヘラミガキで装飾をもつ	・内外ともヘラミガキで装飾をもつ	・穿孔の上に輪文（拓文）	・胴中頃から底部にかけて黒斑	・第5号方形鋼溝溝 ・底に黒斑	・胴下半部から底部にかけて黒斑	・カメ模	・カメ模の蓋

種別		高 杯	高 杯	高 杯	高 杯	
摘要						
法 量 (cm)	口 縁 径	30.35	27.1	22.8	17.4	
	器 高	24.3	24.5	16.4(現存値)	12.2	
	脚 部 底 径	17.85	15.2	欠損のため不明	10.1	
出 土 地 区		3-P F 24	30Y 24	3 P B 24	5 B W 5	
土 器 番 号		13	12	11	第19図	
杯 部	器 形	・直口の口縁で少し内湾している	・水平にひろげた口縁に内端は内方に貼り付けの凸帯をもつ端面は矩形をなす	・水平にひろげた口縁に内端は内方に丸い凸帯をもち外端は下に長く折れ曲る	・曲折して(接ぎ目で)斜めに広がる口縁をもち、端面は丸く終る	
	文 様			・口縁端面円周にヘラミナ		
	整 形 (外)	・細かな横、斜めのヘラミナ		・口縁端は横方向にヘラミナ ・杯部は縦にヘラミナ	・口縁に近いところは横ナデ杯の下半部はヘラミナ	
	(内)	・口縁近くはナデ杯の上半部から中心に向かってヘラミナ	内外とも横方向にヘラミナ	・横ナデの上に縦にヘラミナ	・ヘラミナ	
脚 部	器 形	・柱状部は中空であるが下面をふさいでいる ・スソ端面は肥厚して鋭利な先端をもつ	・脚部は中空でスソまでならかにひろがり端面は肥厚する ・スソ端面上に凹線文 1 本	・柱状部は中空で、下半部は急に広がる ・スソ欠損	・上からスソまでならかに斜めに広がる ・スソ端面は充分整形されていない ・中頃に 2 孔 1 対 (近接している) 2 組 ・スソ端面に凹線	
	整 形 (外)	・脚部縦に細かなヘラミナ ・スソは内外ともナデ	・脚からスソまでヘラミナ ・脚部はナデ	・縦にヘラミナ	・細かく縦方向にヘラミナ	
	(内)	・柱状部をふさぐため粒土をのばしたあとあり ・部分的に横方向に刷毛目	・しびり目のあとあり ・下半部は横にヘラミナ ・スソはナデ	・しびり目のあとあり	・スソは横ナデ	
色 調		・ヘラミナで茶褐色化している	・灰褐色	・茶褐色、部分的に赤茶、黒色がまじる	・灰褐色	
胎 土		・微粒	・0.1~0.2cmの砂粒含む	・0.1~0.3cmの砂粒含む 黒雲母	・0.1~0.2cmの砂粒含む	
質 精			精	精	精	
備 考		・内板充填法	・円板充填法 ・第 5 号方形周溝墓の供献土器	・内板充填法		

たのちも、他の目的で使用されたものと考えられる。

柱状片刃石斧 長さ9cmのえぐり入柱状片刃石斧である。えぐりのある側の刃部は、たてに薄く剥離している。(図版三五・9)

扁平片刃石斧 典型的な扁平片刃石斧ではなく、刃部側はかなり丸味をもつものである。(図版三五・8)

環状石斧 ほぼ2分の1を欠失している。穿孔は両面からおこなわれているが、普通両面から穿孔した場合にみられる、孔の中間部分の酸は明確でない。

刃部には刃こぼれがみられ、擦痕はすべて中心部に向かっている。(図版三五・10)

石庖丁 型態的に分類すれば、すべて半月態を呈するものであるが、幅が広く短いもの、幅が狭ましく身の長いものがあり、刃部も外弯するもの直線のもの、内弯するものがある。

刃部に著しい刃こぼれの認められるものには、刃部と反対の背の側にも損傷がみられる。単に穂つみ具として使用しただけでは、こうした損傷はみられないはずであり、別の用途を考えるべきかもしれない。(図版三四・1～8)

大型石庖丁 三角形の大型の石庖丁の破片が2点検出されている。他の石庖丁にくらべて、刃部の損傷はほとんど認められない。(図版三四・9)

石鏃 型態としては、凸基、凹基、尖基、柳葉形などがあり、長さも2.9cmから、6.6cmの大型のものまである。(図版三三・1～7)

石槍 完形品は検出されていないが、身巾が広く厚みの薄いものと、身巾が狭ましく、太いものとが認められる。前者は極めてたんなる剥離によって整形されているが、後者は荒い剥離によって整形されている。

いずれも全体の長さは不明であり、仕上げの方法や型態が、用途によって異なるものなのか、時期差としてとらえるべきなのかについて不明である。(図版三三・8～12)

磨製石剣 身の中央に筋をもつ鉄剣形の石剣である。完形品はなく、検出したものはいずれも折れた部分を再研磨していて、二次的に他の目的で使用されたと考えられる。(図版三四・10.11)

石鏃 ねじきりとして使用されたと考えられる断面が三角形のものと、形は石鏃に近いものみきりがある。先端あるいは側面に使用痕とみられる磨めつがみられるが、形の上からだけで従来石鏃とさ

れて来たものの内には、その使用痕を明らかにすることによって、石碇となるものもあると考えられる。(図版三三・13.14)

碇石 図版三五・12は目の荒い砂岩であり、両面ともよく磨滅している。

図版三五・11はやや小形のものであるが、ややきめの細い砂岩である。石質によって碇石を使いわけていたかどうかについては、今後の検討を待たねばならない問題である。

不定形剥片石器 すべてサスカイトの剥片の縁にチャッピングを施したりしただけの石器であるが、刃部がかなり磨滅していて搔器として使用されたとみられるものや、尖頭器として使用されたと考えられるものもある。

各地の弥生時代の遺跡から、こうした不定形の剥片石器がかなり出土することはよく知られているが、今後これらの用途を明らかにするためには、その使用痕を詳細に検討しなければならないであろう。(図版三三・15~21)

紡錘車 石製品と土製品とがある。石製品はすべて磨製で、石庵丁の二次加工品もある。土製品はすべて土器片を二次加工したもので、本来産であったもの、さすが付着し産であったと考えられるものなどがある。(図版三三・1~6)

〈白井美紀子〉

3. 木 製 品

昭和41年に行なわれた第二寝尾川開削工事に伴うC地点の調査では、桟・鋤・鉢・堅杵などの木器が出土している。

今回の調査においても予想通り約40点の木器、数十点の建築用材、数百点にのぼる自然木が出土している。木器の約半数は農耕具であり、ほかは容器・工具・用途不明品などである、これらのものは、いずれも弥生中期の層より出土しており、保存状態はかなり良い。

鍬 鍬は近年各地の遺跡で続々と山上しており、多くの種類があることが明らかにされている。本遺跡からも5種類のものが出土している(鍬に関しては、突起の面を裏とし、もう一方を裏とする)。

挾鍬 (図版三六・10) 長さ26.7cm、幅は欠損していて、不明であるが孔の位置から約8cmと推定できる。表は頭部よりが約3cm隆起して刃先に向かってゆるやかに傾斜し、先端は約8mmになっている。隆起の部分には直径3.5cm、裏面に対して約70°の傾斜の孔が穿たれている。裏は孔から刃部までがかなり磨滅しており、整形時のけずり目はほとんど確認出来ない。それに比べて裏面はあまり磨滅していない。

丸鍬(図版三六・4) 柄が挿入されたままの状態出土している。着柄は約55°の鋭角で、握部が鍬身から約31cmまで残存している。柄の頭は表より約1.3cm突き出ておりかなり摩滅している。鍬身の形は他遺跡出土のものとは多少違い、長さ15.6cm、幅21.4cmの小型、しかも丸みを帯びた方形をしている。しかし木目が鍬身の左右に走る木取の仕方からみると、使用方法は、他の丸鍬と同様であろう。刃は木司に直交する両側のみにつけられている。

鍬(図版三六・2) 最大幅17cm、長さ約20cm。鍬身の厚が3本の歯から成っており、頭部が彎曲している。厚さは、3cm~2cmで表がすこしふくらみをもっている。ふくらみの部分には直径約2.7cmの柄を直角に挿着するための孔が穿ってある。

広鍬(図版三六・3) 頭部が狭く、船形突起部分がせり出して上端となるやや特異な形の鍬である。孔は頭部の端一杯に穿ってあり、他の鍬に比して大きい。直径約4.5cm前後のかなり太い柄が55°の鋭角に挿入されていたのではないかとと思われる。又残存している部分の厚さからみると、刃部はかなり薄くなるようである。型は大中の湖南遺跡出土の頭部の狭い広鍬に類似しているので広鍬の一種としたが、半分焼失しているため決定的ではない。他の遺跡では広鍬の出土例がもっとも多いが、本遺跡ではほかに柄の挿入してある舟形突起が一点出土しているのみで、未成品らしきものも見当らない。

鍬(図版三六・7) 鍬は全部で10点出土しているが形を成しているものが少なく、ほとんどが破片で出土しているため、今のところ形式の確認が出来るのは2種類のみである。

1. 一本作りの踏み鋤で、柄は75.8cmの丁字形である。鋤身の先端がかなり欠損しているため全長は不明であるが、残存部から推定すると約110cmになる。この鋤はかなり使用されたらしく鋤身のいたみがひどい。とくに右の部分は側面の原形を留めないほどに、又左の部分は表面が摩滅し相当うすくなっている。

2. 刃の短かいスコップ状の鋤である。かなり腐蝕しており、原形は明確ではない。この種の鋤はほかにそれらしきものが2点出土している。

田下駄(図版三六・5) ほかに農耕具に関するものとして田下駄2点がある。

1. 縦233cm、横10cm、厚さ1.2cmの長方形で四孔が穿ってある。これは原木から下駄の輪郭をとり、孔を穿っただけのものであ

る。全体に腐蝕しているため使用痕は明らかでない。

2. 縦19.5cm, 横10.6cm, 厚さ0.8cm前後の長方形である, 1とは長さが多少違うが, 孔の間隔はほとんど同じである。これは完成品であり, 使用によって表面がなめらかになっている。

以上が農耕具に関するものである。今のところ木器の材質鑑定がなされていないので正確なことは言えないが, 鉄・鋳はカシ類に属する材を使用していると思われる。田下駄の材は不明であるが, 2点はそれぞれ異なった材を使用している。

工 具

大型鎌刈石斧の柄 (図版三六・6) 長さ58cmで石斧の押着部の断面は二辺がやや丸味をもった三角である。3辺のうちの扁平な面を石ノミで穿孔しかけた未成品である。側面と握り部は, 刃幅約1.2cmの鋭利なノミで比較的ていねいに加工しているが, 扁平な面はやや刃幅の広いノミで大まかに加工している。握り部の端は叩き切った状態である。押着部の幅が約8cmであるからこの明が完成すると, 断面の短径が6cm前後の石斧が挿入されるのであろう。

そ の 他

槽 (図版三七) 縦43.5cm, 横20.2cm, 高さ13.7cm, 底側面の厚さは3cm前後で, 断面が凹状のものである。内面は, 刃幅が20cm前後のもの1cm前後の二種の工具を使用して細かく削っている。底は両側にはすこし窪みをつけている。外面は大まかに削ったあと研磨したのではないと思われるほど滑らかになっている。故意に加工したものか, それとも使用によるものであろうか。

用途不明の木器 (図版三八)

1. 半円形で, 直線の長さ46.3cm, 直線から曲線までの最長が24.6cm, 厚さ2.8cmで, 3cmの孔を穿ってある。両面とも曲線側が面取りしてあるだけでほとんど加工の跡が見られない。孔は両面から荒らく押打して穿っている。二面のうち一面には幅約1cm, 深さ3mmの溝状の窪みが見られる。これは刃物で加工した状態ではなく, 使用による摩滅かどうか明確でない。他の一面は乾燥によりひどくひび割れている。この木器は形態は鎌に類似しているが材質が鉄とは異なるので, 異なる用途を考える必要がある。

そのほかに薄い板が10点あり, そのうちの1点には両面に朱を塗ったものがある。

その他本遺跡から出土している木製品には, 高杯の脚部, 杯部の破片, 形態は不明であるが容器の底と推定されるものなどがあるが, 詳細は次の機会を待って報告したい。

〈大西真由美〉

V ま と め

今回の調査は、巾5mの下水道管渠築造工事予定地に限られたため、検出した遺構のうちには必ずしも性格が明らかでないものも含まれているが、弥生時代中期だけでなく、弥生時代後期、古墳時代前期～後期、奈良～平安時代の各時代にわたって遺構や遺物を検出した。従来調査結果とも合わせて、この地域には、弥生時代前期から歴史時代に至るまで引続き集落の営まれたことが明らかである。

歴史時代の遺構としては、3OR24で検出した掘立柱建物をおげ得るのみであるが、瓦器等を含む包含層はほぼ全域に存在し、周辺の水田・畑にも散布がみられる。南に存在する巨摩座寺との関連をも含めて、今後集落の性格や規模について充分な検討が加えられるべきであろう。

古墳時代に属する遺構としては3PI24で検出した6世紀の井戸や3PY19で検出した5世紀のピット、3PY15で検出した土器群等をあげることができる。集落のあり方等については、今後の検討を待たねばならない。

弥生時代後期の遺構としては3PY7で検出した溝などがあるのみで、その他調査地域西端5BW5で高杯などを検出したにとどまる。弥生時代中期に比べて遺構も少なく、出土遺物もわずかであり、今回の調査結果からはその集落のあり方を知ることのできる資料はほとんどない。今後周辺の調査結果にまたねばならない問題であろう。

弥生時代中期の遺構としては、多くのピット・溝のほか、方形周溝墓・土壇墓等を検出した。

ピットの内には柱根を残し、住居跡と推定されるものもあるが、調査範囲が限られたため、ほとんどその性格を明確にすることはできない。

大小の溝についても同様のことが言えるのであって、集落の周辺を周ると推定されるものや、方形周溝墓群と土壇墓群を画すると推定されるものもあるが、かならずしも今回の調査結果からだけでは断言は出来ない。

方形周溝墓は5基検出したが、いずれもかなりの盛土をもつものであり、方形周溝墓本来の姿が明らかとなったものとして極めて重要なものである。

5基の方形周溝墓の内、埋葬主体を検出したものは1基のみであ

ったが、木棺墓1・壺棺墓4を同一盛土中から検出し、家族墓としての性格がよくわかれるものであった。

盛土層部と溝中からは供献されたと考えられる土器を数出したが、土器供献のあり方も一様でなかったことが明らかである。方形周溝墓群の西方には、総数20以上にのぼる土壙墓群を検出している。

これらの方形周溝墓や土壙墓がどのような広がりをもつものであるかは不明であるが、集落の西端近くに一定の墓域が設けられていたことは明らかであろう。

方形周溝墓と土壙墓の被葬者については、盛土をもつ墓とそうでないものの差、木棺とそうでないものの差を、どのように考えるか今後充分検討を加えねばならないであろう。

今回の調査によって各所で自然の流路を検出したが、内に含まれる遺物によって、北から南に次第に流路が変っていることが明らかである。

河内平野には古く幾本にも分かれて大和川が流入していたことはよく知られている。これらの川が形成した自然堤防上に、点々と弥生時代の遺跡が存在するが、川筋によって、はたしてこれらの遺跡が1グループとしてのまとまりをもつものとしてとらえられるのかどうかについても、今後各遺跡の遺物その他を充分検討して行かねばならないであろう。

弥生時代中期の遺物としては、土器・石器・木器・自然遺物その他多くのものがあるが、その多くは遺構上面を覆っていた黒色砂質の包含層中から検出したものである。

この包含層には畿内第2様式～第4様式の土器を含んでいて、階位的な分離は不可能である。

第2様式の土器と認められるものとしては、壺が多く壺その他はほとんど認められない。このことから、一応第2様式として分けた土器が、はたして様式としてとらえられるかどうかについては、今後の検討を待ちたい。第3様式の段階に至ってもなお壺のみは古い形式を残しているとも考えられるからである。

さらに検出した多くの土器には、瓜生堂で製作された以外の土器が多く含まれており、今後これらの土器を詳細に検討することによって瓜生堂遺跡と他の遺跡との関連はもちろん、河内平野における瓜生堂遺跡の位置づけについて重大な問題が提起されるであろう。

石器については、検出したものは少ないが、この遺跡全体の傾向を示すものであるかどうかについては不明である。

石庖丁のうち、刃部に大きく刃こぼれの認められるものには、反対側の肩部に何かでたたいた状態の損耗が認められ、穂つみ具以外の目的で使用された疑のあることが池上遺跡の出土例から指摘されているが、この瓜生堂遺跡出土例にもかなりそれが認められる。

木器は工具としての石斧柄や、耕具としての鋤・鎌・容器としての高杯その他、各地の遺跡で発見されている一通りの遺物が出土している。

これらの木器からは、第3様式～第4様式時における生活内容、特に水田経営のあり方は、前期のそれとほとんど変りのないものであったと推定される。

水田跡については、今回の調査では明らかにし得なかった。さらに遺跡の西端および北端はほぼ明らかにし得たが、南あるいは東にどの程度の広がりをもつものであるか等については今後の調査を待たねばならないであろう。

自然遺物としては、鹿・猪・シジミ等の動物性のものと、ヒョウタン・モモ・ウリ等の植物性のものがある。

その他花粉分析資料も各層位毎に採集しているが、これらについてはそれぞれの専門家に依頼しており、その結果を待ちたいと思う。

＜田代克己＞

版 圖





3 O P 24 圓立柱建物跡 (西から)



3 O P 24 圓立柱建物跡 (西から)



3PD24～3PG24竈構検出状態



3PY14竈構検出状態



3 P Y 5、6 遺構検出状態



3 P Y 6 遺構検出状態



3 P Y 13 弥生武土器出土状態



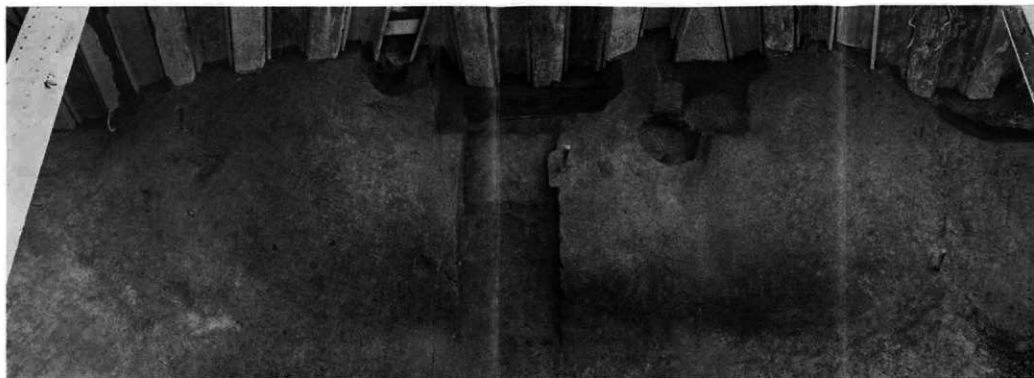
第5号方形周溝墓内土器出土状態



第1号～第3号方形周溝墓全景（東から）



第1号～第3号方形周溝墓全景（西から）



全 景 (北から)



全 景 (東から)



全 景 (西から)



木棺人骨出土状態(西から)



木棺人骨出土状態(北から)



第1号、第2号竈棺出土状態（西から）



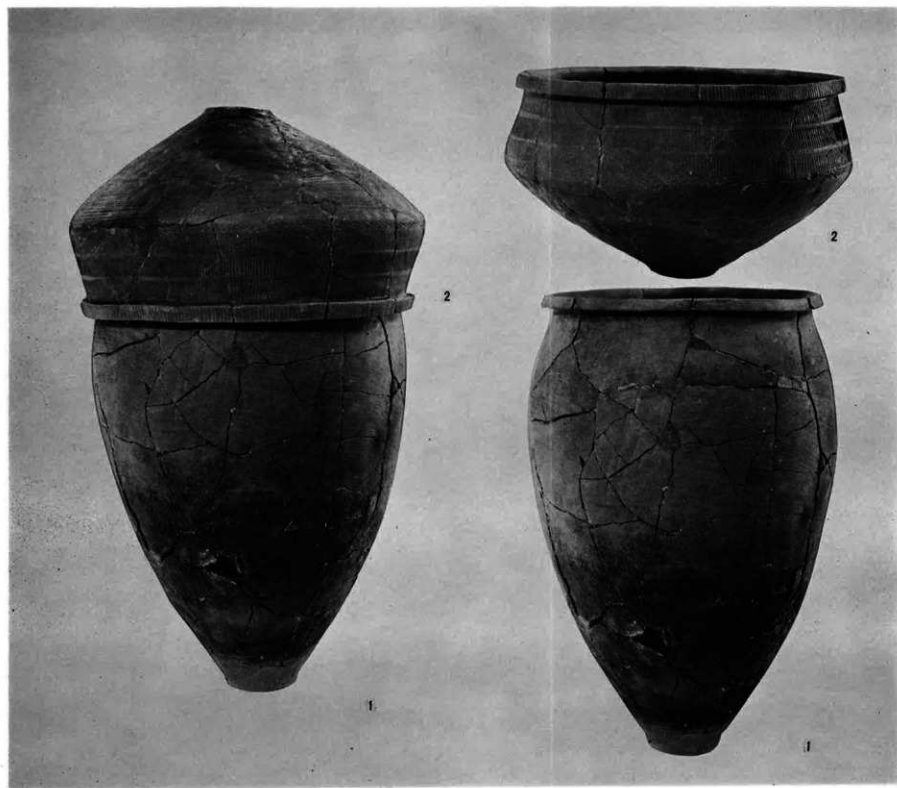
第4号竈棺出土状態（北から）

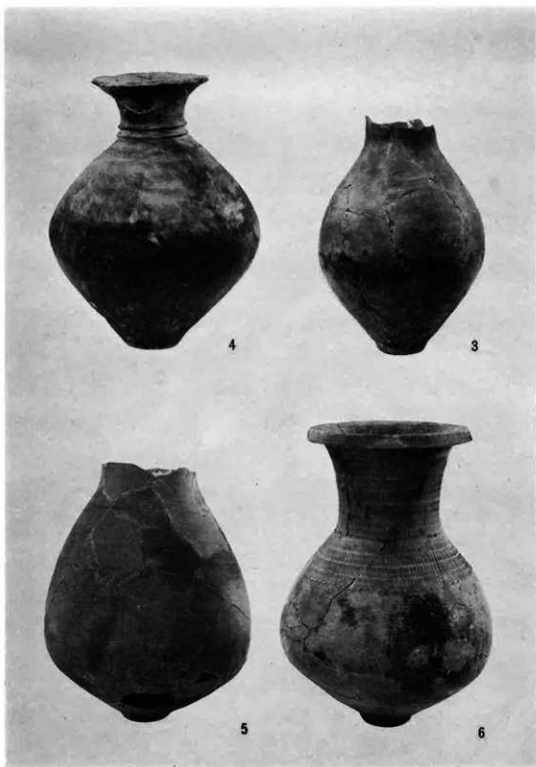


30124~30N24土墳墓群（西から）

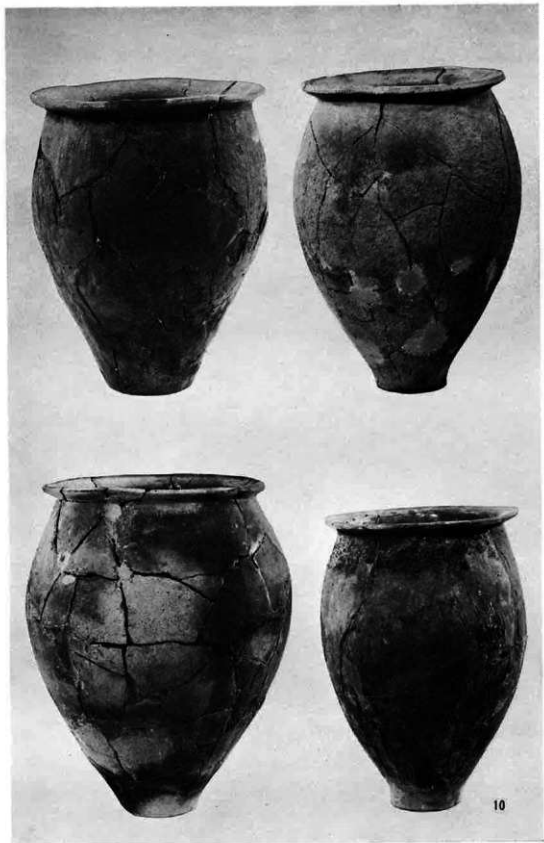


C群第7号、第9号土墳墓（東から）











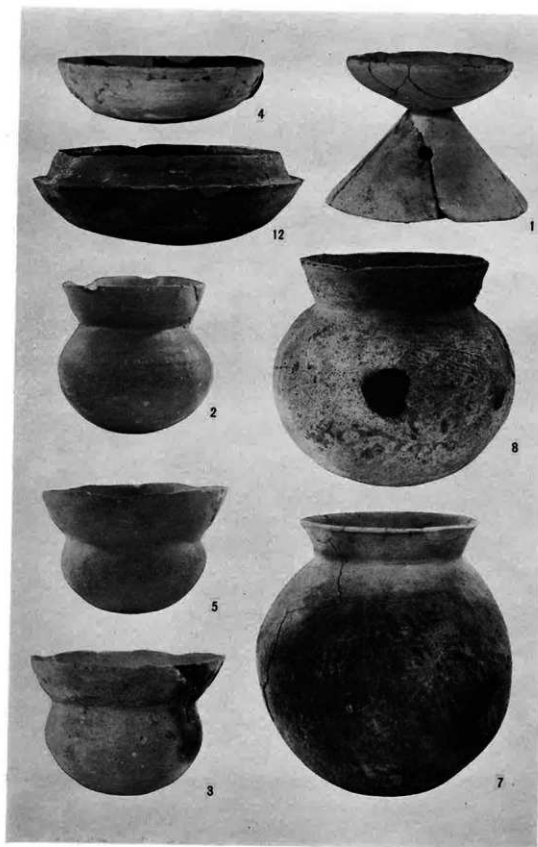


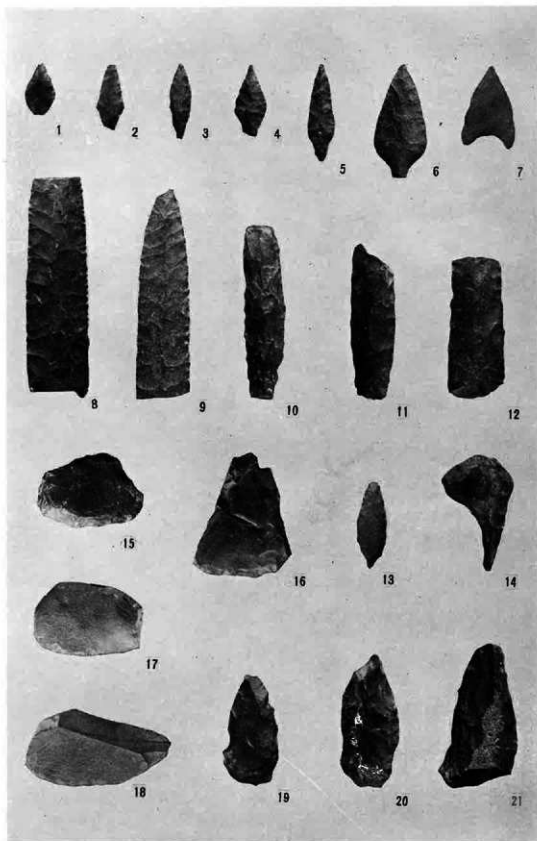
鹿

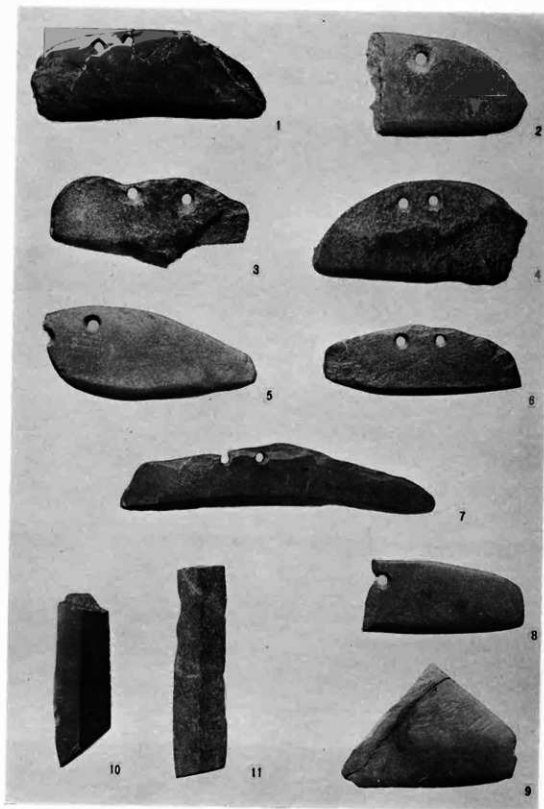


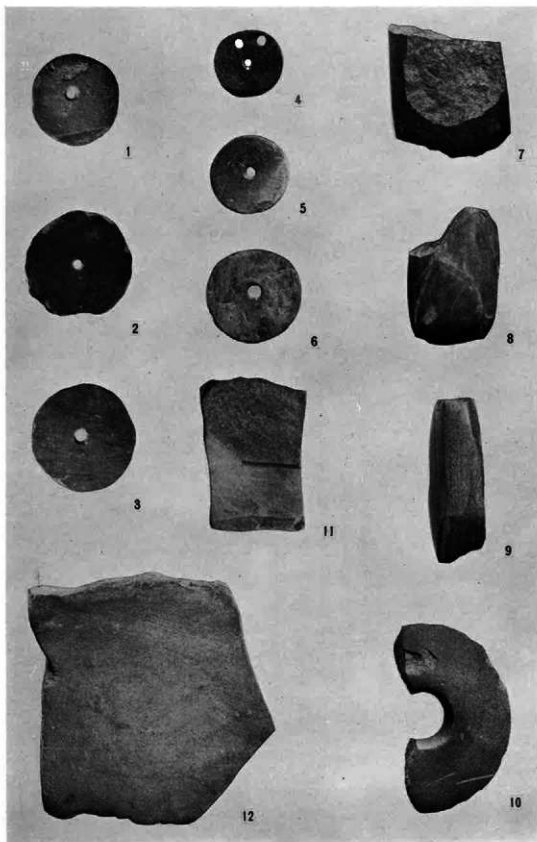
鳥

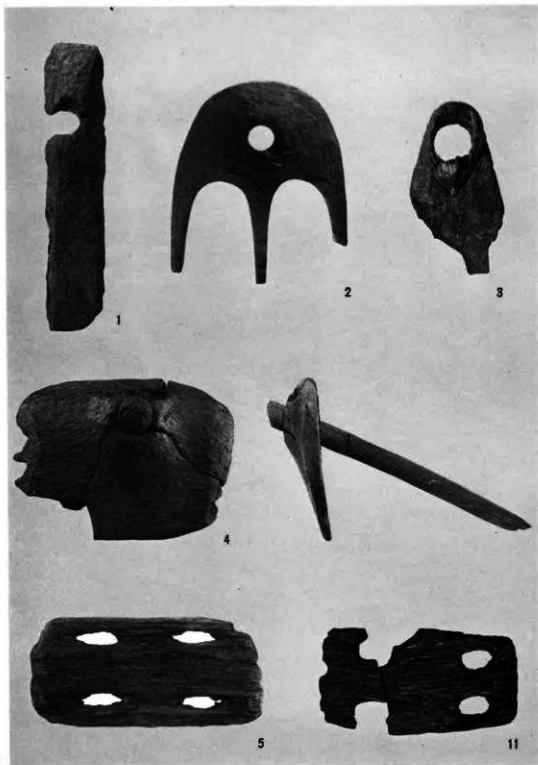


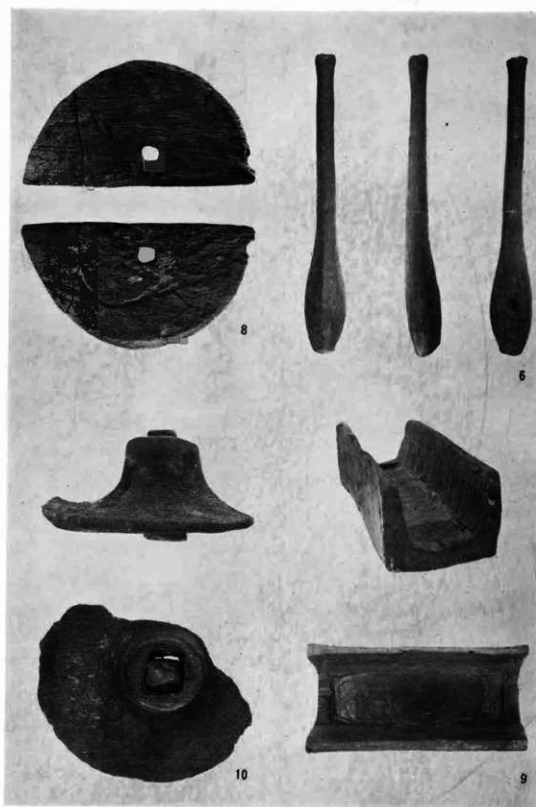


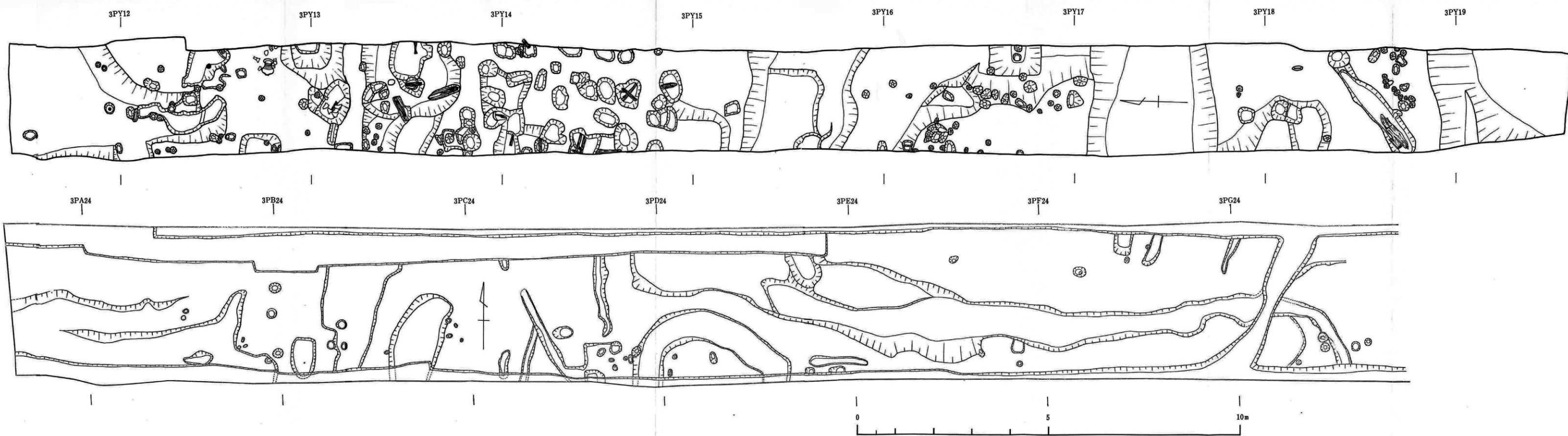


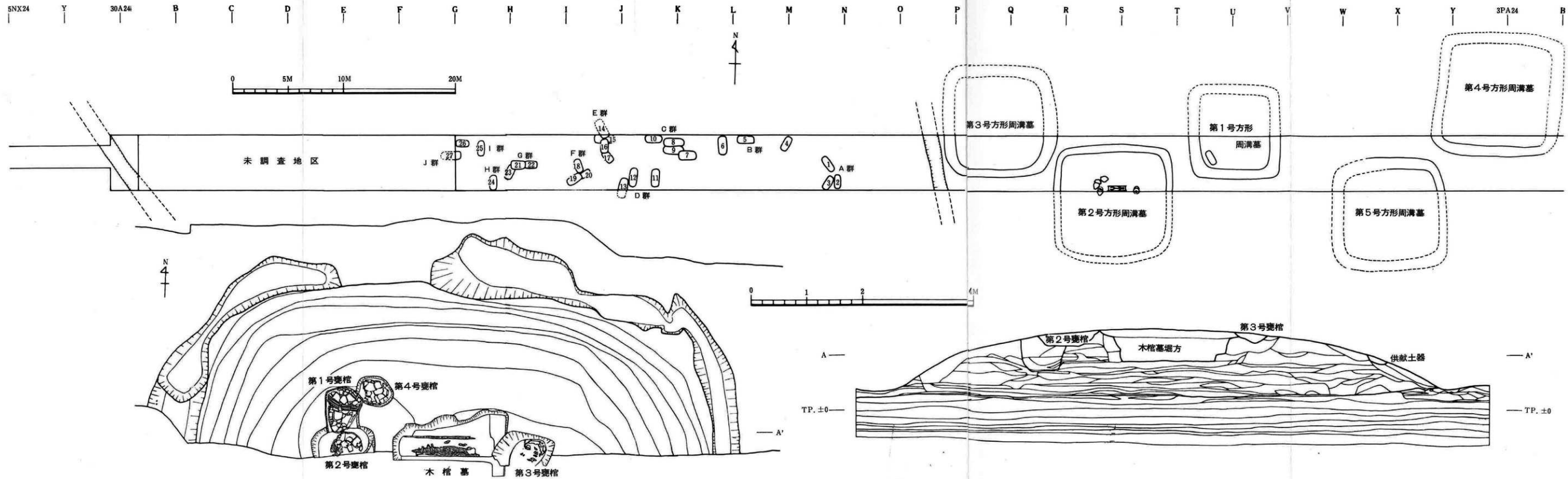




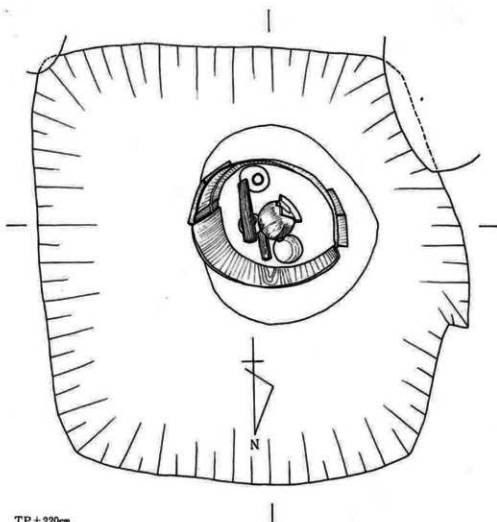




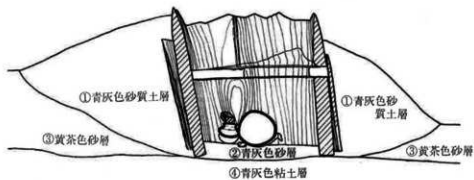




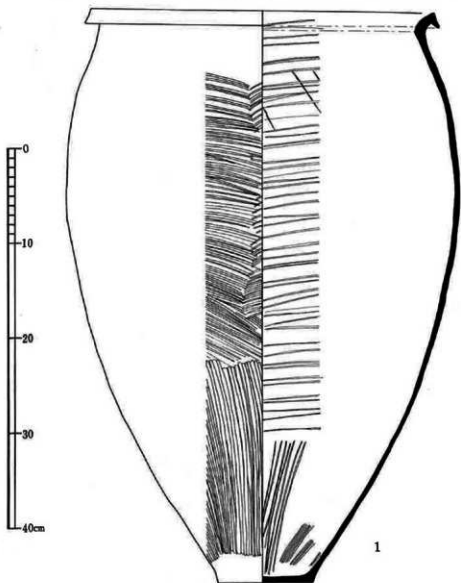
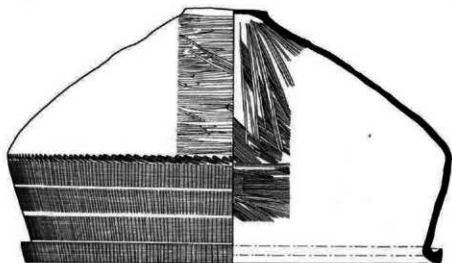
图版二四 方形周溝墓土坑墓配置图。第2号方形周溝墓实测图

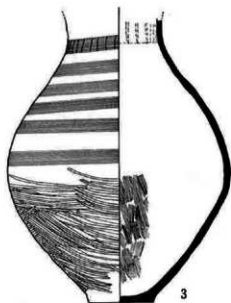


TP+220cm

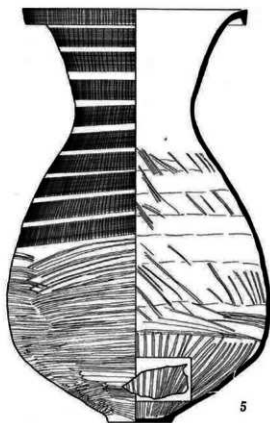


0 0.5 1m

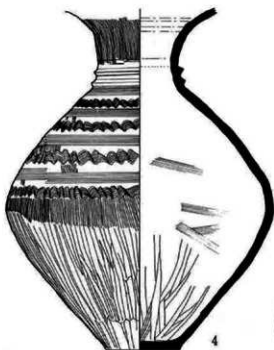




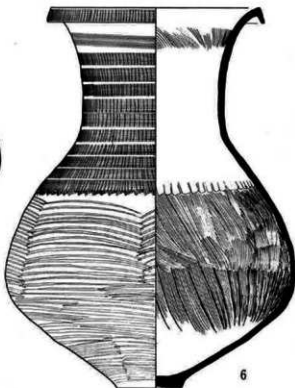
3



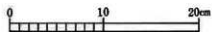
5

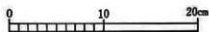
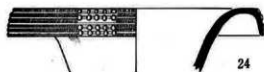
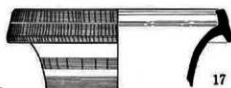
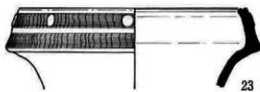
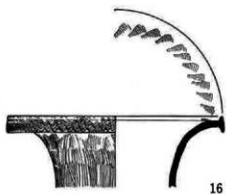
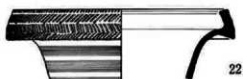
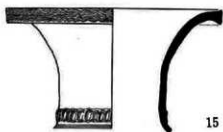
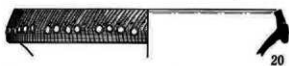
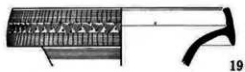
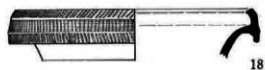
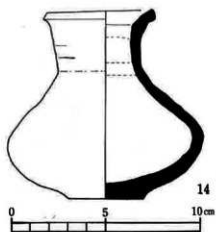


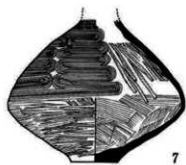
4



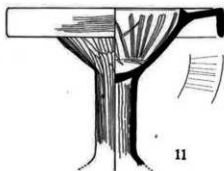
6



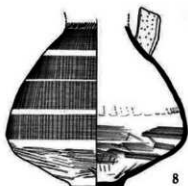




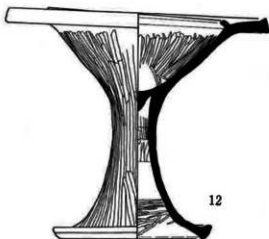
7



11



8



12



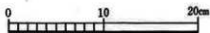
9



13



10

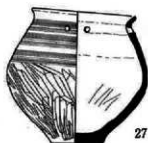




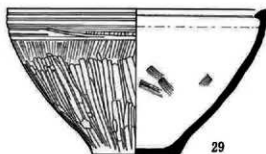
25



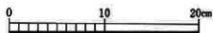
26



27



29



28



30



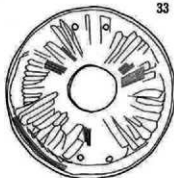
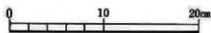
31

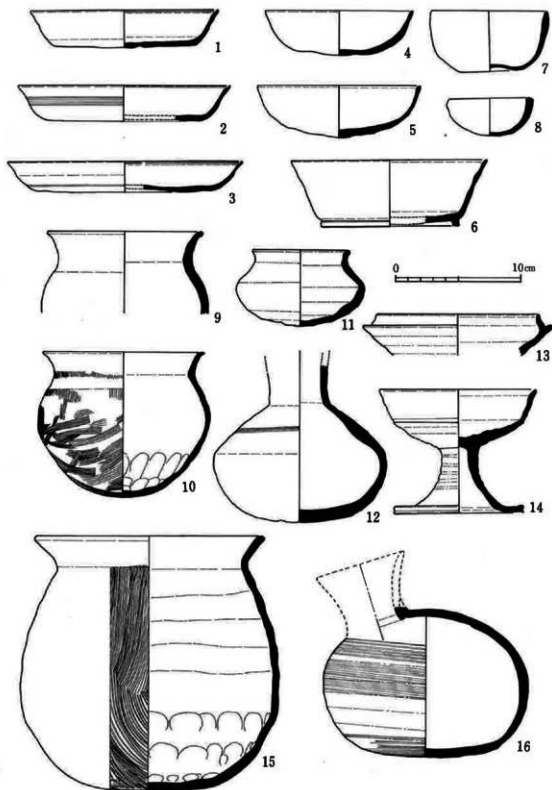


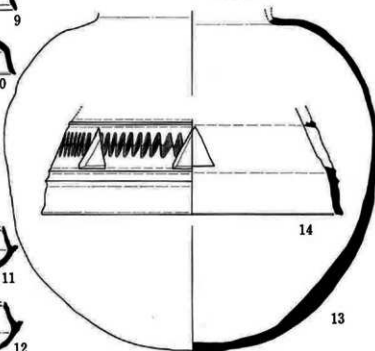
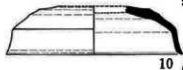
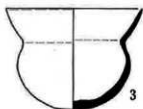
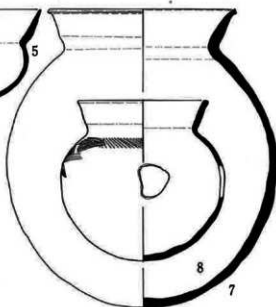
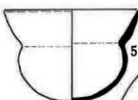
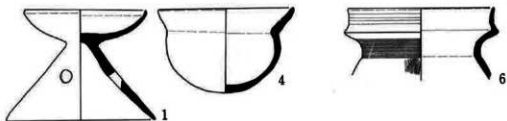
33

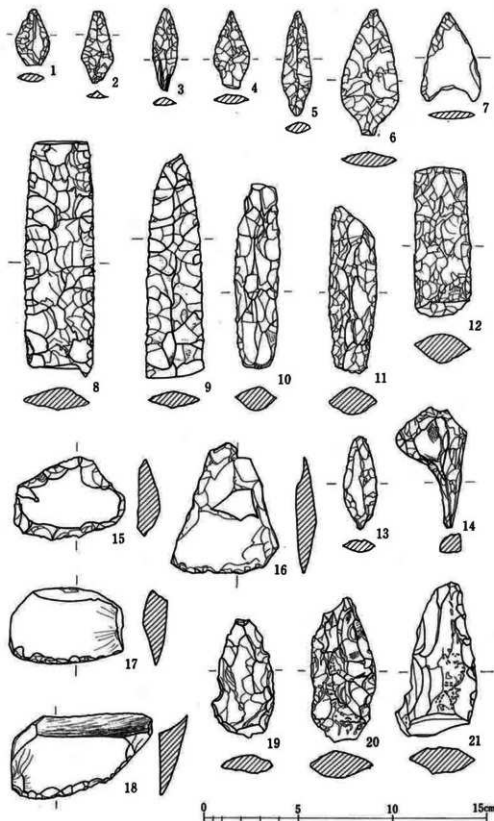


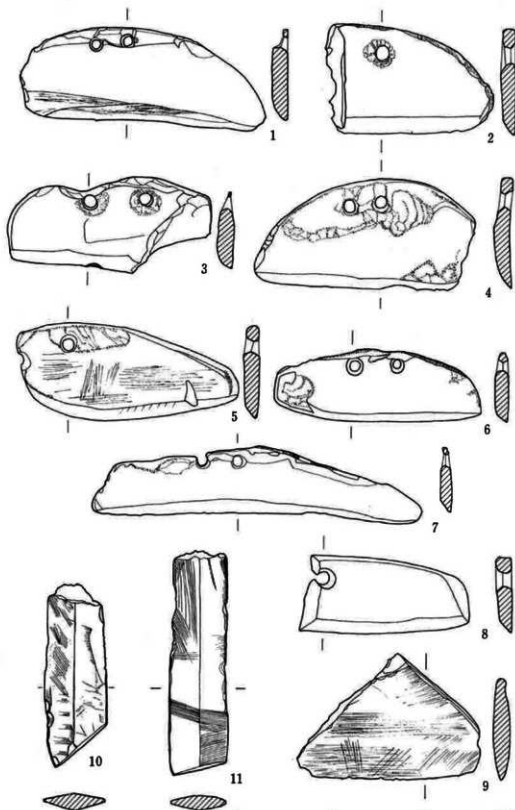
32



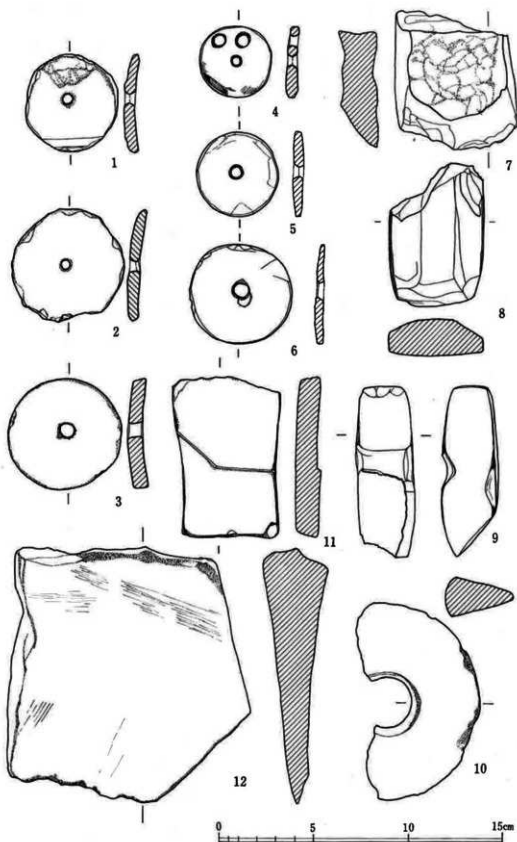


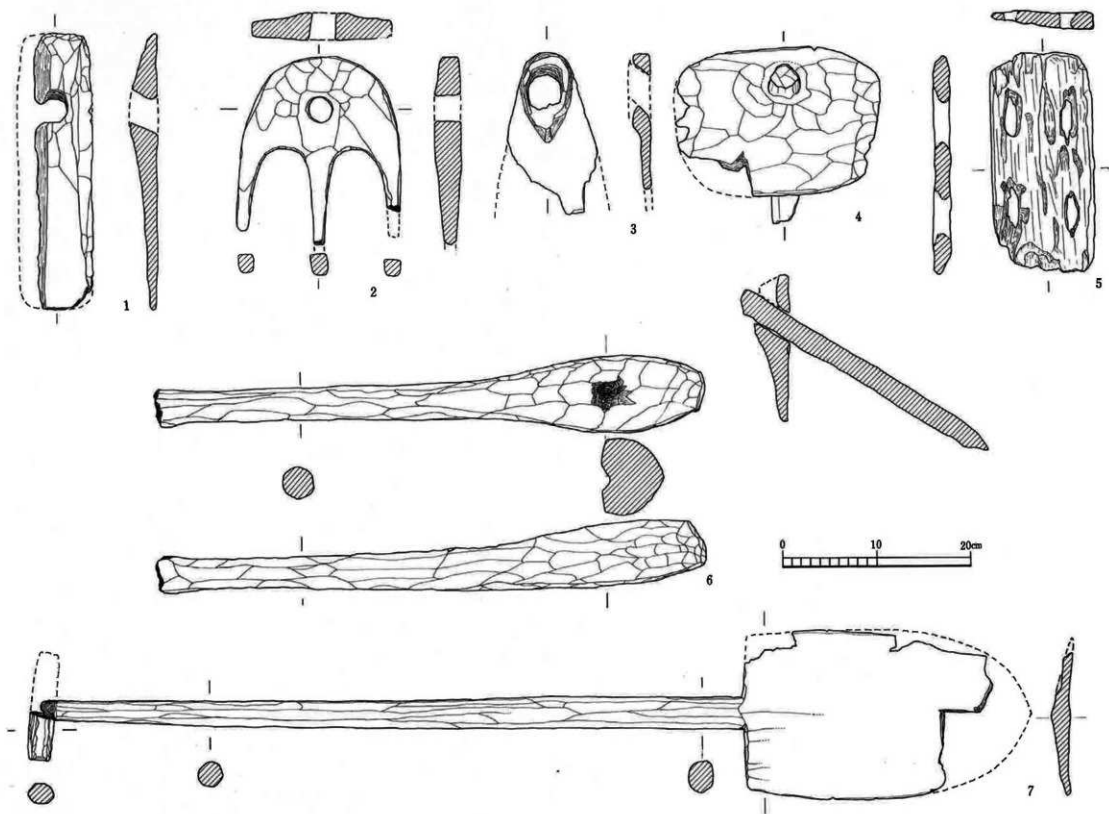






0 5 10 15cm





図版三七 木桶実測図

